

平成30年度 文部科学省初等中等教育局
「教員の養成・採用・研修の一体的な改革推進事業」

平成30年度

継続的な学びにつながる 初任者研修履修証明プログラム

成果報告書



和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）
2019年3月 発行

目次

はじめに	3
I プログラムの概要	5
II 初任者課題研究	11
室 宗介	(和歌山市立日進中学校)
林 宏行	(和歌山市立有功東小学校)
後 雄太	(和歌山市立楠見中学校)
石川 なおみ	(和歌山市立藤戸台小学校)
栗林 拓也	(和歌山市立日進中学校)
西川 史織	(和歌山市立有功東小学校)
小森 優歩	(和歌山市立西浜中学校)
畠中 ちえな	(和歌山市立紀之川中学校)
古井 貴也	(和歌山市立西浜中学校)
III アンケート調査結果の概要	45
IV 成果と課題	55
V 「授業・教材研究」について	67
VI 報告会資料（抜粋）	87

はじめに

1 事業の概要

和歌山大学では、和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会とともに、平成 25・26 年度の 2 カ年にわたり、「初任者研修高度化モデル事業」を行った。この取組みにより高度化研修プログラムを開発することができた。しかしながら、中央教育審議会答申「これからの中学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成 27 年）で、教員が学び続けるモチベーションを維持し、習得した能力や専門性の成果が評価され、実感できる取組みとすることが今後の教員研修の在るべき形であることが提言されたことを受け、高度化研修プログラムの改善に取組むこととなった。

そこで平成 28 年度本事業では、「総合的な教師力向上のための調査研究事業」として、初任者研修を専修免許状取得につながる「履修証明プログラム」として、教職大学院が週 1 回の訪問指導と月 2 回の大学で授業を行う「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」を実施した。当該事業によって、初任者 10 名に対して年間 400 時間の「履修証明プログラム」として実施することができた。

H28 年度事業の検証から、概ね目標を達成することができた。しかし、開発した「授業評価シート」の活用によって、各初任者の授業実践力について詳細にみるとその達成レベルに差があること、本事業による負担感も個人差が大きいことがより明確となった。より適合性の高いものにする必要がある。また、2 年間の研修プログラムの完成年度に当たり、本事業の内容や実施方法を改善し、その成果を確実なものとすることが課題であるとした。

H29 年度本事業においては、「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」として受託された「教職大学院と連動した初任者研修履修証明プログラム」として、教職大学院が主として週 1 回の訪問指導と月 2 回の大学での授業を行う事業として継続、実施した。また、2 年目の受講者についてはこれによって、専修免許状の取得必要単位を満たすことができた。

H29 年度事業の検証から、週 1 回の訪問指導と月 2 回の大学で行う授業は概ね目標を達成することができ、また、連携協力校の管理職や拠点校指導教員の事業への理解や担当教員との相互理解が進み、より協働して、初任者の指導にあたることができるようになったことがわかった。

その一方で、本プログラムが初任者研修の係る期間に専修免許状に必要な単位の修得を目指していたことにより、県や市が行っている初任者研修での初任者の実際的な負担と比して本プログラムの負担が過剰となっているとの意見があった。また、和歌山県では、H28 年度に管理職以外の「育成指標」が先行策定され、教員の資質能力の向上に対して、入職から退職まで継続的な研修の在り方についての検討が進められた。

こうしたことを受け、本学が開発してきた初任者研修履修証明プログラムについても、専修免許取得のための科目履修に係る期間の弾力的運用や研修内容の適性配置、研修の時間の適性、ワークバランスについて再検討を加え、教員にとって成長のための「適度な負荷」となるように改善する必要がある。これにより、H29 年度のもう一つの目的として掲げた本プログラムを拡大することにも応えられると考える。

2 本事業の目的

教員の資質能力の向上に関する指標が策定されたことを受け、専修免許取得のための科目履修に係る期間の弾力的運用など本学が開発してきた初任者研修履修証明プログラムを改善し、広く県・市の初任者研修に導入可能なプログラムとすることを目的とする。

- (1) 科目履修に係る期間の弾力的運用や研修内容の適性配置、研修の時間の適性、ワークバランスについて「適度な負荷」となるようプログラムの改善
 - (2) 専修免許状取得を継続的目標とした教員研修全体における当該プログラムの位置づけの再検討
 - (3) プログラム拡大のための運営体制及び財政基盤の構築
 - (4) 拠点校指導教員や校内指導教員などを対象としたワークショップ(WS)等を開発したものを実施し、その効果を検証
(「初任者支援ための人材養成プログラム(仮)」)
- (テーマ2に応募中の「初任者等に対する校内学び支援力向上プログラム」と協働)

最後に、本プログラムの計画実施に協働して取り組んでくださった和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会、また、連携協力校としてご協力いただいた和歌山市立藤戸台小学校、和歌山市立有功東小学校、和歌山市立西浜中学校、和歌山市立日進中学校、和歌山市立楠見中学校、和歌山市立紀之川中学校、和歌山市立貴志小学校、和歌山市立四箇郷北小学校、和歌山市立貴志中学校に感謝申し上げたい。

(添田久美子)

I プログラムの概要

「継続的な学びにつながる初任者研修履修証明プログラム」の概要

1. 初任者研修履修証明プログラムについて

平成 28 年度 4 月の和歌山大学教職大学院開学と同時にスタートした本プログラムは本年度で実施 3 年目を迎え、名称も「継続的な学びにつながる初任者研修履修証明プログラム」とし文科省の委託事業として行ってきた。もともとこの取組は、平成 25・26 年度に行った「教員免許状修習レベル化に向けた和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会との連携・協働による初任段階の研修の高度化システム構築のための和歌山モデル事業（通称：初任者研修高度化モデル事業）」の成果を取り入れ、それをさらに発展させた形で実施されているものである。

このプログラムでは、教員採用初任年度から 2 年をかけ、科目等履修で修得した単位によって専修免許状の取得が可能となる。在職 4 年目以降に申請すれば、「教育職員免許法別表三」による軽減措置適用によって専修免許状の取得が可能となるものである。

本取組には和歌山市教育委員会の協力の下、平成 28 年度は小学校 6 名、中学校 4 名、計 10 名、また平成 29 年度は、小学校 7 名、中学校 2 名、計 9 名、さらに本年度は小学校 4 名、中学校 6 名、計 10 名の新規採用教員を対象として実施してきた。

2. 初任者研修プログラム協力校

- ・和歌山市立藤戸台小学校 (平成 28 年度 2 名, 29 年度 2 名, 30 年度 2 名)
- ・和歌山市立有功東小学校 (平成 29 年度 1 名, 30 年度 2 名)
- ・和歌山市立四箇郷北小学校 (平成 28 年度 2 名, 29 年度 2 名)
- ・和歌山市立貴志小学校 (平成 28 年度 2 名, 29 年度 2 名)
- ・和歌山市立貴志中学校 (平成 28 年度 2 名, 29 年度 2 名)
- ・和歌山市立西浜中学校 (平成 30 年度 2 名)
- ・和歌山市立日進中学校 (平成 30 年度 2 名)
- ・和歌山市立楠見中学校 (平成 30 年度 1 名)
- ・和歌山市立紀之川中学校 (平成 30 年度 1 名)
- ・和歌山市立河北中学校 (平成 28 年度 2 名)

() 内は実施年度と初任者数、なお、協力校はストレートマスターの実習校を兼ねている。



初任者研修履修証明プログラム協力校

3. 初任者研修プログラムでの学び

初任者研修プログラムでは、次の4つの学びによって研修を行った。

① 授業参観および校内カンファレンス；初任者及び2年次教員対象

月3回の月曜日は、教職大学院教員（研究者教員や実務家教員）が初任者の勤務校を訪問し、初任者の授業を1時間ずつ参観する。放課後に行われるカンファレンスでは、授業の映像や画像をモニターに映しながら授業者による省察を行う。大学教員や拠点校指導員は、具体的な授業場面を取り上げながら初任者への指導を行う。ストレートマスターの実習校では、ストレートマスターもカンファレンスに参加し一緒に学ぶ。

2年次教員に対しては月1回授業参観をし、初任者と共にカンファレンスを行う。



写真1：初任者による授業風景



写真2：2年次教員による授業風景



写真3：放課後に行うカンファレンス風景

② 教職大学院授業（講義・演習）；初任者対象

初任者は、月1回大学で講義を受ける。（原則5コマ 9:10～18:00）

教職大学院は、1年間を4つのクオーターに分ける4学期制をとっており、それぞれのクオーターで次の講義を行った。

- ・第1クオーター（4月3日～6月8日） … 学校・学級経営I
- ・第2クオーター（6月11日～8月6日） … 授業・教材研究I
- ・第3クオーター（8月27日～11月5日） … 授業・教材研究II
- ・第4クオーター（11月26日～2月7日） … 授業・教材研究III

授業シミュレーション教室で行う上記の授業は、ストレートマスター8名と初任者10名が一緒に受講する。ここで行う授業は、講義の他、示範授業や模擬授業、グループ協議や単元づくりの演習等が組み合わされたアクティブ・ラーニング形式の授業となる。



写真4：教職大学院での講義・演習風景



写真5：初任者による模擬授業の様子



写真6：教職大学院教員による示範授業

③ 長期休業中集中授業履修；初任者及び2年次教員対象

8月、12月、1月には、集中講義を行った。今年度は、次の集中講義を設定した。

- ・「道徳教育」… 初任者対象
- ・「特別活動」… 初任者対象
- ・「学校・学級経営Ⅱ」… 2年次教員対象
- ・「子どもの権利」… 2年次教員対象



写真 7: 特別活動 集中講義



写真 8: 子どもの権利 集中講義



写真 9: 道徳 集中講義

④ 宿泊研修；初任者対象

夏季休業中の8月9日～10日には、湯浅町において宿泊研修を実施した。

レクレーション活動の体験や家庭訪問を想定したロールプレイングによる研修、また、いのちの講演家 岩崎順子先生に「当たり前の中にあった大切なものの」という演題でご講演いただいた。



写真 10: 宿泊研修風景

II 初任者課題研究

初任者研修履修証明プログラム 課題研究タイトル一覧（平成30年度）

	氏名	学校名	クラス・教科等	課題研究タイトル
1	室 宗介	和歌山市立日進中学校	2年5組・数学	興味を引く導入の工夫 ～「おもしろい」と前向きに取り組める授業を目指して～
2	林 宏行	和歌山市立有功東小学校	3年光組	子どもの興味関心を生かし、主体的に学べる授業づくり
3	後 雄太	和歌山市立楠見中学校	3年・社会	思考力・表現力を高める授業づくり ～ワークシートと発表方法の工夫～
4	石川 なおみ	和歌山市立藤戸台小学校	1年4組	わかったことを自分の言葉でアウトプットできる 授業づくり
5	栗林 拓也	和歌山市立日進中学校	3年5組・社会	ICT機器の効果的な活用／生徒の主体的な学びを目指し、 学び合いの充実を図る。 そのためのワークシートづくりと授業の工夫
6	西川 史織	和歌山市立有功東小学校	4年光組	子どもたちがつなぎあえる授業づくりについて ～教材研究→授業→ふりかえりのサイクルからの検証～
7	小森 優歩	和歌山市立西浜中学校	2年2組・社会	ICT機器を効果的に活用した学び合いの授業について
8	畠中 ちえな	和歌山市立紀之川中学校	1年4組・音楽	互いに認め合い、自己肯定感を高められる 授業づくりについて
9	古井 貴也	和歌山市立西浜中学校	1年3組・数学	生徒が主体的に学習を進めるための授業づくり ～課題設定とグループ活動の点から～
10	繁 侑里	和歌山市立藤戸台小学校	3年2組	子供が課題に向けて、主体的に活動に取り組み、 楽しくて学べる授業づくり ～課題解決に向けての話し合いの充実を通して～

課題研究計画書

記入日：平成 30 年 5 月 31 日

学校名	和歌山市立日進中学校	氏 名	室 宗介
担当教科・学年・組	数学科・2年生		
研究課題 (研究題目)	興味を引く導入の工夫 ～「おもしろい」と前向きに取り組める授業を目指して～		
課題設定の理由 (問題意識)	学年が上がるにつれて、「算数」「数学」が苦手だと感じる生徒は多くなっていく。それに伴って子どもたちからは「数学が嫌いだ」という声がよく聞かれる。「数学が嫌い」であっては、前向きに取り組むことができずいくら丁寧に指導しても効果は薄いと考える。「数学が苦手」であっても、生徒が「おもしろい」と思える授業を開拓することで数学を学ぶことへの意欲を高め、子どもたちの学力向上につなげていきたい。そこで、特に「授業の導入」「単元の導入」に力を入れて取り組もうと考えた。		
研究目的	数学が苦手な生徒でも、「数学は楽しい」と思える授業を開拓するためには、授業の導入と単元の導入が重要である。そこで、各単元や節の導入の際に用いることで生徒の興味・関心を引くことができるであろう「教具」や「ネタ」を数多く発掘していく。そして、それらを本年度の授業での実践を経て改良・整理してまとめ（「導入パック」とよぶ）今後の教師人生に役立つ財産としたい。		
研究方法・評価	最も力を入れていくのは「単元」や「節」の導入部分である。教科書を最大限に生かすとともに、時には子どもたちの興味・関心に合わせた「導入パック」を作っていく。そのために、数学科教科指導法についての学習を深め、具体的な工夫について学び実践を積みたい。あわせて、他教科でされている導入の工夫についても参考にしたい。そのために空き時間を使って授業参観の機会を増やすと共に、教科の研修会にも積極的に参加したい。評価は、こどもたちの声を大事にしたいという思いから「授業評価」という形で2学期、3学期の末にアンケートを実施してその結果を考察する。また。手ごたえがあった授業は略案の形式で保存していくなどポートフォリオでの評価も行いたい。		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 1 月 28 日

学校名	和歌山市立日進中学校	氏名	室 宗介
担当教科・学年・組	数学科・2年生		
研究課題 (研究題目)	興味を引く導入の工夫 ～「おもしろい」と前向きに取り組める授業を目指して～		
研究の達成状況	<p>「導入」に力を入れて多くの授業を作ってきた。中でも「①視覚教材を用いた授業」や「②生徒の身近なことからを取り上げた授業」、「③いい意味で『不思議』だと思わせることができた授業」の3つについては、生徒が興味をもって授業に取り組むことができていた。</p>		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>2月中旬に数学科の授業アンケートを実施した（回答95名）。</p> <p>「〈i〉 数学の授業を面白いと思ったことはあるか」「〈ii〉 数学の授業は自分の力を伸ばすのに適していたか（進行のスピードや内容）」「〈iii〉 数学は好きであるか」の3問を5段階の数値によって回答させ、その理由を自由記述させた。</p> <p>それぞれ回答の数値の平均値は、〈i〉 3.8 〈ii〉 3.7 〈iii〉 3.1 であった。</p> <p>〈i〉 の自由記述において、上記①～③の授業についての回答が多数あり、生徒にとって印象深いものだったようである。</p> <p>一方で〈iii〉においては、「授業では楽しくできていたものの、結果が伴ってこない」ことが理由で、低い数値の回答が多くあった。やはり生徒には、「数学が好きである」ことは「テスト等で結果が伴うこと」もかなり重要であり、すべての生徒にとって「力が付いた」と感じられるような授業づくりが必要であると考える。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>本研究においては、特に単元の導入に力を入れようと考え取り組んできた。教科書の内容を大切にしながら、時に生徒の興味を引くために独自にアレンジも加えた。</p> <p>【実践事例】上記（研究の達成状況）の①～③</p> <p>①3章「一次関数」より 『自作ブラックボックス』</p> <p>実際に関数の仕組みを踏まえた教材を作成して行った。視覚教材であったため生徒はとても興味深そうにしていた。</p> <p>②2章2節「連立方程式利用」より 『東京ディズニーランドチケット代』</p> <p>来年度の修学旅行で行く東京ディズニーランドのチケット代を求める問題で、生徒に「知りたい・求めたい」と思われる課題であったと考えられる。</p> <p>③2章1節「連立方程式」より 『雉兎同籠問題』</p> <p>漢文で書かれた、約1500年前の問題を取り上げた。生徒は、漢文はまだ国語科できちんと学習してはいないが、漢字の持つ意味を考えながら必死に取り組む姿が見られた。</p>		
当研究に関する課題と展望	<p>大きな課題は2点あげられる。</p> <p>1点目は、今回成果を上げることができた単元にかなり偏りがあることである。今年度は2年生数学科を担当したが、4章、5章の「証明」に関する単元では、ほとんど手ごたえを得ることができなかつた。この単元は、特に生徒に苦手意識を生じさせやすいので今後もしっかりと教材研究を進めていきたい。</p> <p>2点目は、「導入」の段階では成功といえる授業でも、その授業全体で見れば成功とは程遠いものになっていたことである。生徒の興味・関心を引くことができたとしても、授業が進み本時の核となる部分（数学的な内容）になったときに生徒の意欲を持続させることができないことが多くあった。これからは、その後の展開も十分に見通した授業づくりを模索し実践していきたい。</p>		

参照①「作成したブラックボックス

箱に入れたカードが表と裏が入れかわってでてくるように作られている。

【箱入り口】



【箱出口】



カードの表



カードの裏



参照②「東京ディズニーランド スクールスペシャルパスポート」

(中学生の場合)

6400 円 → 3900 円

(大人の場合)

7400 円 → 4400 円

これが、連立方程式の解となるような問題を自作した。



参照③「孫子算經より『雉兔同籠』問題」

原文では数値が複雑だったので、いわゆる「鶴亀算」のようにもしても答えを導出できるよう配慮した。

今有兔雉同籠
上有八頭
下有二十二足
問兔雉各幾何

課題研究計画書

記入日：平成 30 年 5 月 30 日

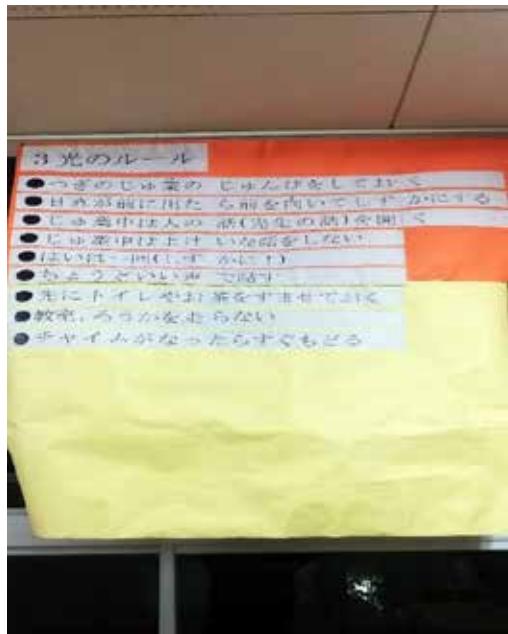
学校名	和歌山市立有功東小学校	氏名	林 宏行
担当教科・学年・組	第 3 学年 光組		
研究課題 (研究題目)	子どもの興味関心を生かし、主体的に学べる授業づくり		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本学級の児童は、活発で様々なものに興味を持って取り組む姿勢がみられる。しかし、落ち着きがなく、自己中心的な言動をする傾向がある。また、授業のグループワークや発表の時間では、自分の意見を優先してしまい、相手の意見を聞いて納得したり、自分の意見を発展させたりすることができないことがある。そこで本学級は、互いの意見を尊重しあう環境づくりをするとともに、相手の話を聞くことで自分の意見に自信を持って発表し、内容をより発展できるような授業づくりを展開していきたいと考える。</p>		
研究目的	<p>子どもの興味関心を生かした授業の展開を考え、実践することにより、子ども一人ひとりが自ら考え、発表し、課題の解決を主体的に行えるのではないかということを目的とし、検証していく。</p>		
研究方法・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活の中で子どもと過ごす時間の中に、どのようなものが子どもたちの興味関心を抱くのかを発見し、授業の展開に取り入れる。 ・発達段階に応じた課題の設定する ・子どもが興味関心を引く話し方や板書の技術を身につける。 ・授業の中で子どもが興味関心や好奇心を引き出す手立て（ＩＣＴや具体物）を工夫し、示す。 ・子どもたちの授業に対する姿勢や態度、発言やノートの記述内容から、自ら授業に参加できているかを評価する。 ・子どもたちの学期、年度を通して自分の姿の変化を評価する。 		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 1 月 15 日

学校名	和歌山市立有功東小学校	氏 名	林 宏行
担当教科・学年・組	第 3 学年 光組		
研究課題 (研究題目)	子どもの興味関心を生かし、主体的に学べる授業づくり		
研究の達成状況	クラスのルールを日々意識させることで、学習規律を整えさせた。その上で、児童の生活体験や学校生活の話を授業に取り入れ、ICT や具体物を用いて視覚的に物事を捉えられるようにすることでどの児童も話し合いに参加できていた。しかし、学習内容の理解が十分できる児童は、クラスの半分ほどである。		
研究達成に関して の根拠・証明等	(資料 1) 教室掲示。児童が授業を受ける姿勢が崩れてきたときにクラスのルールを視覚でも確認するときに活用した。 (資料 2) 教室掲示。児童の学習したことや調べてきたことを掲示することで興味関心を持たせた。 (資料 3) 授業の板書。意見を書かせ、マグネットで内容を評価し、自分の考えを発表させる授業を展開した。		
課題研究に関して 行った工夫・手立て や具体的な実践事例等について	<ul style="list-style-type: none"> 授業の導入で教師や児童が経験したことを伝え、興味関心のあることを探つた。 授業の中で、「いいね」「すごいね」というように、児童のいい部分を褒め、クラスを良い方向に向けさせた。 ノートを回収し、授業の振り返りから児童が探求したいこと、関心のある内容を授業の中で取り上げるようにした。 児童が話し合った内容を掲示物にし、次時の中で考えたり話し合いができるようにした。 道徳で、一人ひとりが考えた意見をホワイトボードに書かせ、自己と他者の評価をさせることで、学習理解や他者理解ができるように指導した。 		
当研究に関する 課題と展望	日ごろから意識して取り組むようにすることで、4 月と比べて授業や学級での生活に対して様々なものに興味関心を持ち、主体的に取り組もうとすることができていたように思う。しかし、授業に対して後ろ向きな児童や学習内容になかなかついていけない、自分の意見をうまく表現できない児童もまだ多い。学級全体がさらに主体的に授業に取り組むことができるよう教師からアプローチをかけること、自分の意見をうまく表現できるように相手に「話す」だけでなく相手に「伝わる」ようにすることがこれからの課題であると考える。		

【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】



(資料 1)

店名	店舗種別	集計
オーツフ	食料品	14人
ローズ	食料品	15人
ディオ	食料品	9人
エバターン	食料品	17人
ラムー	食料品	3人
きょうもフル	食料品	2人
コンビニ	食料品	3人
トランプストア	日用品	6人
インターネット	日用品	2人
その他	日用品	11人

(資料 2)



(資料 3)

課題研究計画書

記入日：平成 30 年 9 月

学校名	和歌山市立楠見中学校	氏 名	後 雄太
担当教科・学年・組	3 年 社会		
研究課題 (研究題目)	思考力・表現力を高める授業づくり～ワークシートと発表方法の工夫～		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本校の教育目標は「たがいに温かく 自己にはきびしく 進んで知を磨き心を養い 体を鍛えていく たくましい生徒の育成」である。</p> <p>「進んで知を磨く」=生徒が主体的に学習できる授業づくりをしていく必要がある。その手立てとして思考力・表現力を高められるワークシートの工夫を考えていきたい。また担当している生徒は、自分の意見を人前で発表することに苦手意識を持っている生徒が多い。自分の意見が仲間の役に立ち、仲間の意見が自分の役に立つという意識づけのもと、苦手意識を克服できるような発表方法を考えていきたい。</p>		
研究目的	<p>「進んで知を磨く生徒」の育成を目指し、思考力・表現力を高められるワークシートを作成することや、生徒の、人前で発表することが苦手という意識を、小グループでの意見交換、発表のサポートなどを通して克服させていくことを目的とする。</p>		
研究方法・評価	<p>研究方法 発表するためのサポート 意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に授業参加させるための興味づけ (ICT を活用した資料提示) ・ペア学習を中心とした生徒間交流の時間を増やす ・授業記録をとり、2 学期間中に学級全員が意見を発表できるようにし、誰もが活躍できる場を設ける ・教科通信等を作成し、他学級の授業の様子や、出た意見などを紹介できるようにする。 ・個人で考える → 小グループで発表する (発表のサポート) → 再度個人で考える という活動の流れを作る。 		

課題研究「成果報告書」

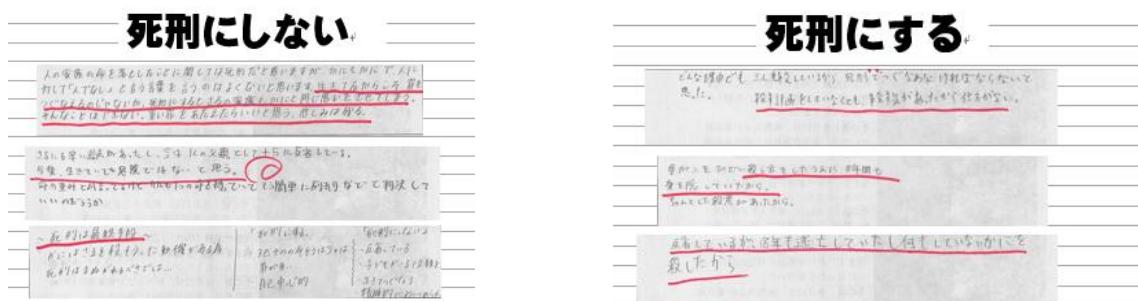
記入日：平成 31 年 2 月 6 日

学校名	和歌山市立楠見中学校	氏 名	後 雄太
担当教科・学年・組	社会 3 年		
研究課題 (研究題目)	思考力・表現力を高める授業づくり～ワークシートと発表方法の工夫～		
研究の達成状況	<p>課題の達成状況は、各クラスによって大きな差があり、全体として計画していたところまでの成果をあげることができなかった。できるだけ毎回の授業で課題を設定し、考える時間を設けワークシートを活用したが、課題のレベルや資料の少なさ、課題に向かわせる意識づけなどの点から、主体的に課題に取り組めない生徒がいた。発表方法では、ホワイトボードを活用したり、学力差のない問題において列指名など全員が活躍できる場を設けたが、苦手意識を克服するには至らなかった。</p>		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>学力の高い生徒は比較的毎時間の課題に取り組むことができていた。しかし、学力の低い生徒や社会科に苦手意識がある生徒を課題に向かわせることができなかった。</p> <p>学力差が問われない、「気づくことを書き出す」「賛成・反対」「教科書の読み取り」などは大多数の生徒が取り組めた（資料 1・2）。しかし、「なぜ」「どうなった」「資料から考える」など思考力を問う課題については取り組むことができない生徒が多くいた。課題設定のレベル、資料の選択や提示の方法、学習意欲を高めるワークシートづくりを徹底できなかったことが原因であると考えられる。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>ワークシートの作成では、個人の考えを書き込める枠と、他人の意見や板書を書き込める枠を設け、個人思考の過程が明確になるよう工夫した。また、授業中に気になったことや、疑問点などを瞬時に書き込める授業メモ枠も作成し、主体的に授業参加できるよう工夫した。当初は、何をメモしていいのかわからない生徒たちであったが、その都度促すことで、何も言わなくても重要なこと、気付いたことをメモできるようになった。</p> <p>発表方法の工夫についてはペアでの意見交換や、列指名での発表などでそれぞれが活躍できるよう工夫した。発表がどうしてもできない生徒に対する対応として、意見をホワイトボードに書かせて（資料 3）、クラス全体に紹介した。また、普段の課題で表現することができなくても、学力差のない課題に取り組ませ、後日ワークシートの裏にその意見を掲載することで、活躍する機会を設けた。</p>		

【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

当研究に関する 課題と展望	<p>授業形態としては、今後もワークシートやICTを使うことを中心としていきたい。ワークシートづくりについては、生徒の興味を引き学びたくなるような工夫を研究していかなければならない。資料や写真などを張り付けるだけでなく、文言やレイアウトなども考えていきたい。発表方法についてもルール作りを徹底し、誰もが発表しやすい空間を作ることができるよう工夫していきたい。</p>
------------------	---

資料 1

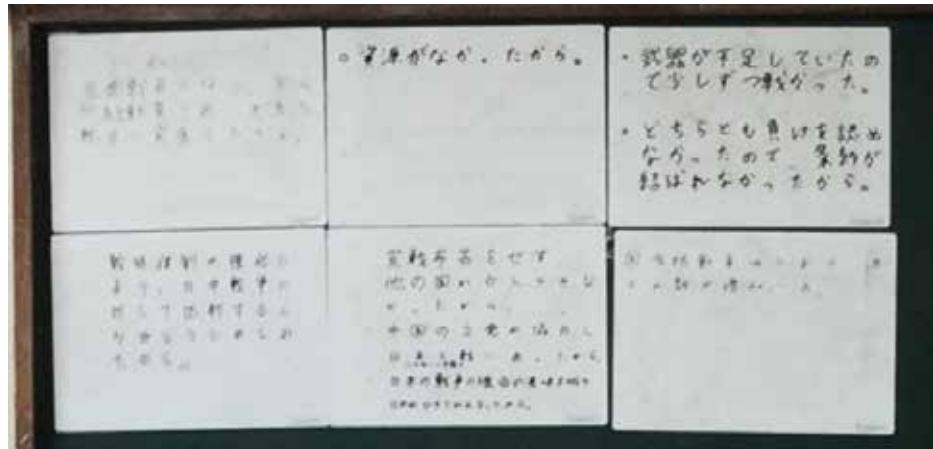


資料 2

あなたはどんな働き方をしますか？

<p>大学時代卒業してきちんと丁寧な働き方で正社員になりました。</p> <p>上のBさんみたいにめがけない。ずっとアシハヤイトやパートで働きつつ死刑にあがんで少しやりあえず大学院でボランティアをしたら。</p>	<p>私は正規雇用の手帳持替り賃金で働きたいです。</p> <p>パートでもいいかなと思いまして、バイトと似たような感じにならうからなので正規雇用で働きたいです。</p> <p>年中育児賃金がいい理由は特にないです。</p>
<p>今は、成果に向かってから成績主義が多いです。</p> <p>あとで、大事なことならいいけど、お金元がいる。</p>	<p>自分自身が経営者。今どうかドタツで、まだ伸び悩んでる感じで、自分の成長が止まっている感じで、何とかならない。</p>

資料 3



課題研究計画書

記入日：平成 30 年 9 月 4 日

学校名	和歌山市立藤戸台小学校	氏 名	石川 なおみ
担当教科・学年・組	1 年 4 組担任(国語科)		
研究課題 (研究題目)	わかったことを自分の言葉でアウトプットできる授業づくり		
課題設定の理由 (問題意識)	本校の教育目標は、「自分の成長を感じる子供の育成」である。研究主題は、「問題解決に向けて主体的・協働的に学ぶ個と集団の育成～子供同士の関わりを通して、学びを深める授業づくり～」である。子供は、わかったつもりになっていることが多いので、自分でわけを話したり、簡単な文章に書いたりすることができればと考えて設定した。		
研究目的	・聴き方・見方・考え方のポイントがまだ定着していない中で、自分の中でわかったことを、指さししたり体で表現したり、言葉や文で表すことができるようになるために、どんな支援をしていけばよいかを考えていく。		
研究方法・評価	<p>研究方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ○聴く・見る・考えるクラスづくり ・絵本の読み聞かせをし、想像を膨らませながら楽しく聞くことができるようにする。 ・見るポイントを指さすなどして、常に意識させる。 ・自分の気持ちを簡単に話したり、マークを選んだりする。 <p>評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童の表情や発言・ペアトーク・ふりかえりのノートの書き方、ワークシートをもとに評価する。 		

課題研究「成果報告書」

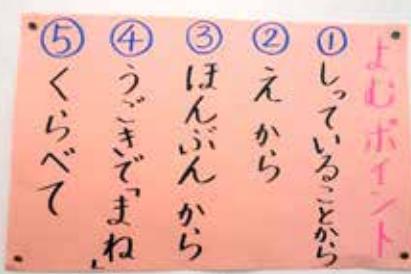
記入日：平成 31 年 2 月 21 日

学校名	和歌山市立藤戸台小学校	氏 名	石川 なおみ
担当教科・学年・組	1 年 4 組担任(国語科)		
研究課題 (研究題目)	わかったことを自分の言葉でアウトプットできる授業づくり		
研究の達成状況	自分でわかったことを、「ここにあるから」と指差したり、体で表現したりできるようになってきている。しかし、書く視点を示しても、言葉では、言えてもノートにまとめて書くことに抵抗のある児童も数名いる。		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>(資料 1) 教室掲示。</p> <p>○声の大きさ・ふりかえりの書き方・発表する時の手の挙げ方を確認する時に活用した。</p> <p>(資料 2) 児童のノート・ワークシート。</p> <p>○「〇〇さんはなしをきいて、～がわかった。」と、書くことを通して、どれだけ友達の話を聞くことができていたかをふりかえることができるようになった。</p> <p>(資料 3) 自動車図鑑作りをして。</p> <p>○グループ活動を通して、どんなふうに書けばいいのかを話し合いながら、仕上げることができた。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本の読み聞かせをしたことにより、読書への関心が高まり、読書タイムでは、そのシリーズや同じ作者の人の本に興味を持ちながら読んでいる姿が見られた。 ・友だちにわけを説明するときには、指示棒を使わせた。指示棒を使って説明してみたいという意欲がでてきて、挙手する児童が増えた。 ・自分の気持ちを発表できなくても、常に「ハンドサイン」で表現するというルールにしたことにより、考え中の児童も挙手できるようになった。 ・ふりかえりのノートやワークシートに書く時には、誰の考えを聞いて、そう考えるようになったのか、「〇〇さんの〇〇を聞いて・・・」と書かせるようにした。そのことにより、友だちの話を聞こうとするようになってきた。 		
当研究に関する課題と展望	どの児童も、自分なりにその時間にわかったことを発表したり、うなづいたり、ハンドサインの合図をしたりするようになってきている。しかし、自分中心で行動することが多く、友だちの考え方や思ったことを最後まで聞けない児童もある。自分なりにわかったことを言葉にしたり、表現したりできるようになって		

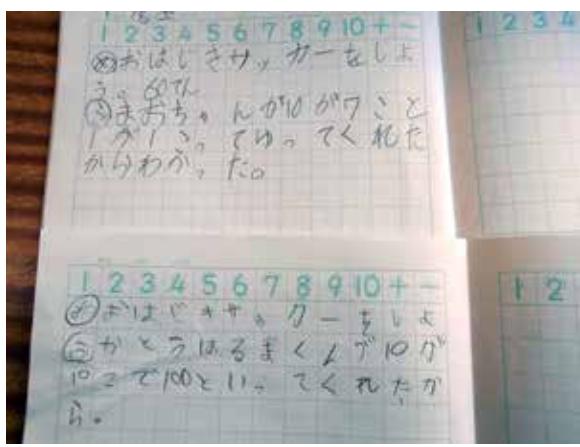
【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

	きているが、クラスのみんなにその考えが十分伝わっていないこともある。もっと、クラスみんなで一致団結できるようなゲームや音読会や劇遊びの機会を増やす必要があると思った。
その他（新たに生まれた課題・問題意識等あれば）	ふりかえりの視点を示しても、学力の困難な児童にとっては、字を書くというだけでも大変なことであると痛感した。どの子も楽しく授業に取り組めるような教材研究・発問の仕方やタイミングをしっかりとしていきたい。

(資料 1)



(資料 2)



(資料 3)



課題研究計画書

記入日：平成30年 9月 6日

学校名	和歌山市立日進中学校	氏名	栗林 拓也
担当教科・学年・組	3年5組担任 (社会科)		
研究課題 (研究題目)	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器の効果的な活用 ・生徒の主体的な学びを目指し、学び合いの充実を図る。そのためのワークシートづくりと授業の工夫 		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>IT化が進む現在、将来の職業においては、今ある職業がなくなり、まったく新しい職業ができる可能性が非常に高い。そうした中で、多様な考え方や、仲間と話し合い協力して物事を成し遂げる能力が必要となる。</p> <p>特に社会は語句の丸暗記にとどまり、しっかりと考へるということができない生徒が多い。和歌山県は学びの共同体を推進していることから、これを機会にしっかりと研究し、生徒が主体的に学べる授業づくりを展開する。</p> <p>また、イメージしにくい分野においては、ICTや具体的なモノをしっかりと活用し、生徒が体感することで内容がわかる授業づくりを目指す。</p>		
研究目的	<p>前勤務校において、「学びの共同体」による授業を実施していた。そのため、学びの共同体による授業について、深化させ、授業力の向上並びに、生徒たちの関係性の構築に努めたい。また、生徒たちがしっかりと学びあえる教具としてのICTの効果的な活用方法を深めたい。</p>		
研究方法・評価	<p>協同学習の導入では、生徒の「すでに知っていること」をもとに、逆に「あれ？」と思わせ、「なぜだろう」「面白いな」「調べてみようかな」と思えるような導入（～なのに～なぜ）になるよう、対比や比較、否定、矛盾などの発問を取り入れる。その上で、問い合わせを発見させる資料や仮説を検証するための資料づくりや掲示、ワークシートの作成を工夫する。</p> <p>ICTについては、生徒への掲示の仕方や良いタイミングを授業の中で繰り返し改善していくとともに、書物（インターネットを含む）を読んだり、ICTを通じた先生などに色々な使用方法を教授して頂くことで、活用方法を研究していく。</p>		

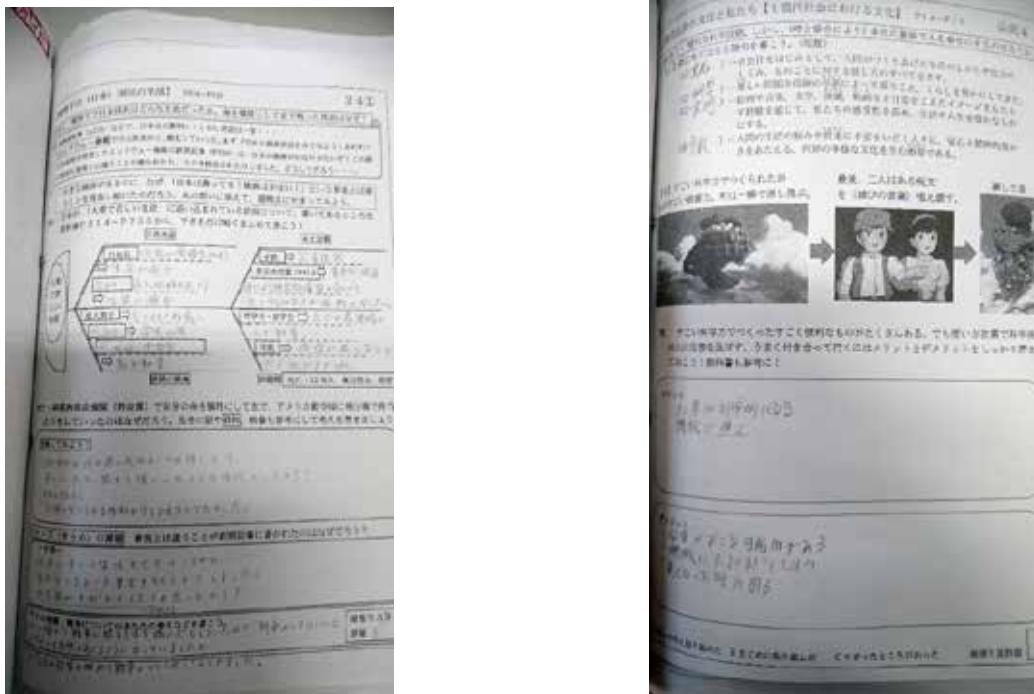
課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 1 月 16 日

学校名	和歌山市立日進中学校	氏 名	栗林 拓也
担当教科・学年・組	3 年 5 組担任 (社会科) 研究クラス 3 年 2 組		
研究課題 (研究題目)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT 機器の効果的な活用 ・ 生徒の主体的な学びを目指し、学び合いの充実を図る。そのためのワークシートづくりと授業の工夫 		
研究の達成状況	<p>工夫したワークシートと協同学習によって、学び合いの態勢づくりを整えることができ、生徒どうしが主体的に学び合う様子が多くみられるようになった。しかし、発表については、書いたものを読む程度に終わった。</p> <p>また、ICT を利用して映像を見せたり、パワーポイントを用いた授業を行つたので、具体的なイメージをすることができた。</p>		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>資料 1：生徒のノートから勉強が苦手な子も含めて、ほとんどの生徒が授業中にきちんとノートできている。（+居眠りをする生徒が少ない）</p> <p>資料 2：授業アンケート・感想（どの生徒もしっかりととした内容で書けている）</p> <p>資料 3・小ホワイトボードを使用したり、意見を書かせたりしている。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>「まずは一人で考えてみよう、わからなければグループ内で聞いてみよう」のカードを作成し、常に黒板に表示したり、冒頭で言ったことで、自然と協同学習の流れができた。また、発表や先生の話を聞く際には、体を話す人の方に向けるなど、発表しやすい環境づくりを行った。生徒同士が発表を聞いて理解することで、自然と発表後の拍手が起こるなど、授業において良い取り組みの成果がみられた。また、生徒が主体的に取り組めるワークシートの工夫を行つた。</p> <p>歴史分野では、「体感」させることを目標に、映像をみせる際にも、しっかりと自分の意見をかけるよう、感想の用紙やワークシートの工夫を行つた。また、教師による寸劇や読み聞かせを行つた。</p>		
当研究に関する課題と展望	<p>協同学習をさせたことで、生徒同士が学びあえる環境づくりは成功したものとの、発表をさせる工夫をさせることが次の大きな課題であると感じている。工夫次第でもっと生徒同士が学び合い、また、ことばの力育成につながる。</p> <p>また、ICT は使用したが「効果的な使用」や「ICT 使用の種類」はまだまだ研究するところが多いので学び続けて生きたい。</p>		

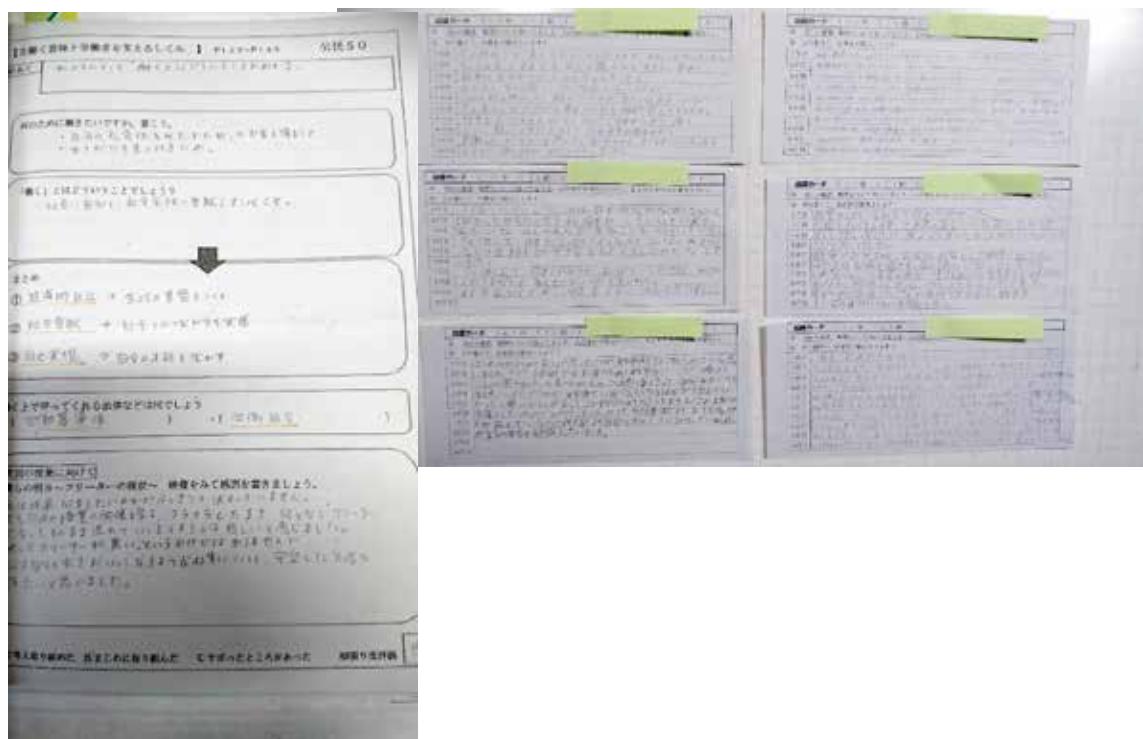
【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

資料 1



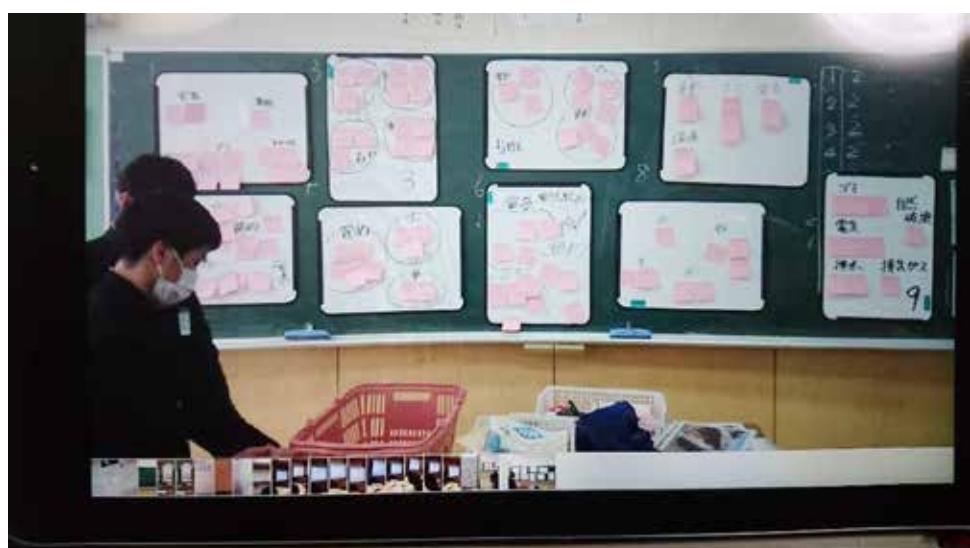
(勉強が苦手な生徒も少し書いている)

資料 2 映像など、具体物を用いることで、しっかり感想が書ける



【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

資料3 ホワイトボードの活用



課題研究計画書

記入日：平成 30 年 8 月 30 日

学校名	和歌山市立有功東小学校	氏名	西川 史織
担当教科・学年・組	4年光組 担任		
研究課題 (研究題目)	子どもたちがつなぎあえる授業づくりについて ～教材研究→授業→ふりかえりのサイクルからの検証～		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本学級の児童は、活発な児童が多く、意欲的に授業に取り組む様子がみられる。授業中の発表については、自分の考えについて発表することができ、友達の意見と自分の意見を比べながら聞くことができる児童もいる。しかし、何人かの児童は、ノートに自分の意見を書いているにも関わらず、発表するまでには至っていない。</p> <p>そこで本学級では、意見をつなぎあえる児童を核として、学級全体でつなぎあえる授業づくりを展開していきたいと考える。</p>		
研究目的	教師が児童の意見をつなぐのではなく、子どもたちがつないでいくことによって、学習内容の理解がより深まっていくのではないかということを目的とし、検証する。		
研究方法・評価	<p>【教師の教材研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師の児童の取り上げ方の研究。 例) 算数であれば、問題を解く際に困っている児童の意見から出していき、学級全体で正解を導いていく。 各授業における児童のふりかえりから、児童の興味関心、疑問をみつけ、次の授業にいかす。 <p>【授業中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表の仕方（聞き方、言い方、比べ方）などを提示。 教室の掲示を利用した、発表の仕方への取り組み。 「めあて」、「まとめ」を児童に考えさせ、授業は自分たちのものであるという認識をつける。 <p>【ノート】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の意見をノートに記述し、発表の際に自分の意見をしっかりと持つことができるよう取り組む。 ふりかえりを毎時間書いていくことで、授業の中で何を学んだのか、自分で考え直す。 		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 2 月 15 日

学校名	和歌山市立有功東小学校	氏 名	西川 史織
担当教科・学年・組	4 年光組 担任		
研究課題 (研究題目)	子どもたちがつなぎあえる授業づくりについて ～教材研究→授業→ふりかえりのサイクルからの検証～		
研究の達成状況	4 月当初に比べると、少しずつではあったが、意見を繋ぎあえる児童の輪が広がってきた。また、友達と意見をつなぐことまでは達成していないが、自分のノートに意見を書き、発表することができる児童も増え、お互いの意見を聞きあうことができる学級に近づけることができた。		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>自分の考えをしっかりとノートに記述することができるようになった。また、自分の考えを書くだけではなく、友達が発表した考え方を受けて、自分の考えを書くことができる児童も増えてきた。</p> <p>授業中の発表の中で、「似ていて」、「少し違って」、「質問です」などの繋ぎ言葉を使う児童が増えてきた。発表が苦手な児童においても、授業後の振り返りの中に、「○○さんの考えを聞いて・・・」などと友達の意見を意識している様子が見受けられた。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>【教師の教材研究】</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童のノートの振り返りから、児童が疑問に思っていることなどを取り出し、次時の授業づくりへとつなげていった。 <p>【授業中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「にていて」、「少しちがって」などの繋ぎ言葉を使っている児童をほめ、繋ぎ言葉を使う児童を増やしていった。 自分の考え方を掲示し、児童が見直すことができるような掲示づくりに取り組んだ。(資料 1、2) 毎時間、授業のまとめを自分たちで考えさせることで、毎時間どのような学びがあったのか考えるよう意識づけた。 <p>【ノート】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を書くことが苦手な児童には、「友達の発表を聞いてから考えたことを書く」→「自分で書き始める」のように段階を踏んだ助言をした。 振り返りを毎時間書くことで、授業の中で何を学んだのか、自分の中で考えなおす時間をつくった。(資料 3、4) 		

【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

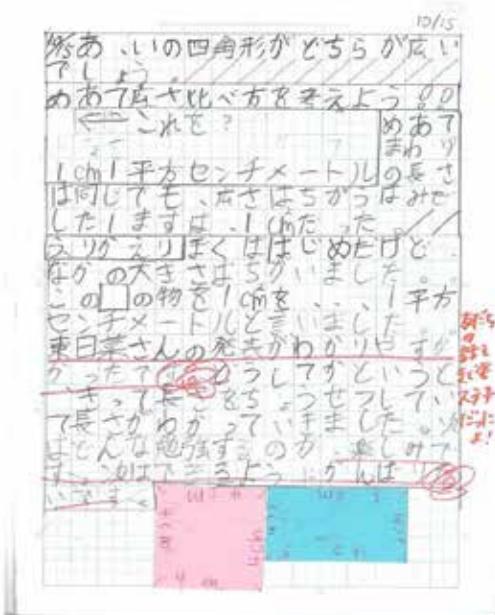
	<p>本研究を通じて、子どもたち同士で意見をつなぐ難しさを改めて感じた。担任として、子どもたちの意見をどのように、拾い上げていけばいいのかを考えることが、課題である。</p> <p>また、すべての児童ではないが、自分のノートに考えを書く活動をしっかりと取ることで、発表することや、友達の意見を自分事として聞き入れることへとつながっていった。この結果を踏まえ、今後の実践の中でも、まず、ノートに自分の考えを書く活動を常時取り入れていくと同時に、ノート指導にも力を入れていきたい。</p>
--	--



(資料1 ごんぎつねの掲示)



(資料2 のはらうたの掲示)



(資料3 児童のノート1)



(資料4 児童のノート2)

課題研究計画書

記入日：平成 30 年 8 月 30 日

学校名	和歌山市立西浜中学校	氏 名	小森 優歩
担当教科・学年・組	社会科・2年		
研究課題 (研究題目)	ICT 機器を効果的に活用した学び合いの授業について		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本校の生徒は、授業を落ち着いて受けことができ、意欲的に取り組むことができている。学力は高い生徒が多いが、暗記に頼っていて、文章で答える場面になると答えられない生徒が多い。こうした生徒の実態を踏まえ、グループワーク等を通じてお互いが学び合い、自分の考えを言葉にして伝える場面を多く設けたいと考える。</p> <p>地理的分野では ICT 機器を効果的に活用することで、物事を多面的・多角的に考察し、地理的な課題解決に向けて公正に選択・判断したことを説明する力を生徒につけてほしい。歴史的分野では、各時代の特色をとらえさせるとともに、歴史上の人物と文化遺産を尊重しようとする精神を培い、国際協調の精神を養わせたい。</p>		
研究目的	どのような場面でどのような課題を設定すれば、ICT 機器を効果的に活用でき、より深い学びにつながるのかを明らかにする。		
研究方法・評価	<p>【研究方法】</p> <p>生徒が自分の考えを深めるためには、話し合いの場を多く取り入れることが必要であると考える。その上で、ICT 機器を活用し課題解決や発表をすることで、深い学びにつなげたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グラフや写真、動画等の資料活用を ICT 機器で行い、話し合い活動をする。 ・グループ等で話し合った内容を、ICT 機器を使って説明や発表をする。 <p>【評価】</p> <p>グループ学習等の話し合い活動や、ノート・ワークシートから、生徒の達成状況や学習の深まりを検証・評価していく。</p>		
その他 (質問・依頼・要望事項等あれば)	提示用デジタル教材を作成して、毎授業の導入場面や思考を深める場面での活用は既に実施している。今回の課題研究では、グループに 1 台のタブレット型モバイル端末を活用ていきたい。そのための機器の貸与や技術支援を要望したい。		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 2 月 15 日

学校名	和歌山市立西浜中学校	氏名	小森 優歩
担当教科・学年・組	社会科・2年		
研究課題 (研究題目)	ICT 機器を効果的に活用した学び合いの授業について		
研究の達成状況	<p>日ごろは落ち着いて授業を受けている生徒も、グループ活動になると積極的に言動するようになった。自分の考えを言葉にして伝えることが苦手な生徒は、同じグループの生徒に協力してもらい課題解決ができるようになってきた。定期テストや授業の中で、文章で答える場面では、当初よりも答えようとする姿勢が見えるようになってきた。書く内容も当初に比べ、より的確に書けるようになってきた。</p> <p>また、ICT機器の活用に関しては、平面の資料だけでなく、立体的に見える資料を用いることで、より多面的・多角的に考察することが可能となった。導入の場面で ICT 機器を用いた際、アニメや生徒の身近なものを提示し展開することで、生徒の興味関心を引くことができた。さらに、資料の読み取りや発表の場面で ICT 機器を用いたことにより、より積極的に発表をする姿勢が見え、公正に選択・判断した資料をもとに説明する力がついた。</p>		
研究達成に関する根拠・証明等	<p>①授業での様子</p> <p>日ごろから落ち着いて授業を受けられているが、ICT 機器を使った授業はより一層生徒の関心を引くことができ、授業に集中することができていた。また、グループワークの学習では、一斉授業よりも生徒の意見が深くなり、発言も積極的に行うようになった。</p> <p>②生徒のノート</p> <p>③アンケート結果</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>ICT 機器の活用に関しては、1 学期ではパワーポイントを使った資料提示、2 学期はそれに加えグーグルアースや動画などの資料を使った。3 学期には、生徒自身が ICT 機器を使い、説明や資料の読み取り等をすることができるようになった。</p> <p>グループ学習については、最低週 1 回行うよう心がけた。グループワークの形は、ペアや 3 人形態・4 人形態など、そのときの課題に合わせて変えた。資料はさまざまな難易度を用意し、グループの中で学力の低い生徒でも取り組めるよう工夫した。</p>		
当研究に関する課題と展望	<p>今後も、ICT 機器については引き続きパワーポイントを中心に毎時間の授業で活用していきたいと考えている。課題としては、生徒自身が ICT 機器を扱う場面をどのように設定するかである。</p> <p>グループ学習については、ジグソー法など様々な学習方法に挑戦し、その学習方法の特性をつかみ、どの教材でどの学習方法が効果的なのか、探りたいと考える。</p>		

【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

①授業での様子

【北海道の稻作（導入部分の視覚的な提示）】

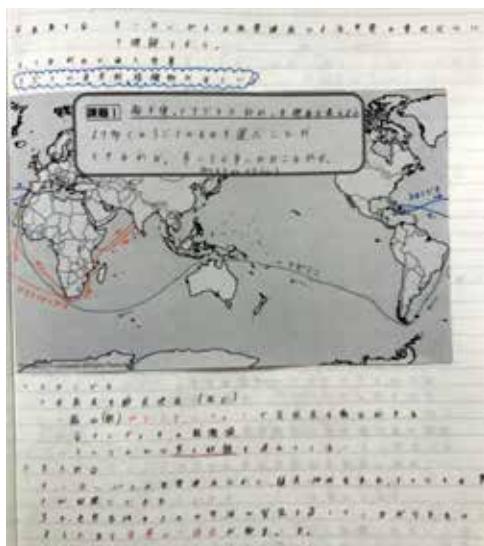


【江戸図屏風の読み取り（グループワーク）】



②生徒のノート

【世界のつながり】



()月()日()限目				
めあてを達成できたか	よくできた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
自分で考えることはできたら	よくできた ○	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
自分の意見を発表することができたら	よくできた ○	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった

今日の授業を振り返って分かったこと、分からなかったことを書こう！
私が使った理由は、荷物をいじりかせられるから、というのである。
たしかに、航路を新しく開拓することで、支配地を拡大させられたものもある、たぶんいかないかと思ひました。

()月()日()限目				
めあてを達成できたか	よくできた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
自分で考えることはできたら	よくできた ○	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
自分の意見を発表することができたら	よくできた ○	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった

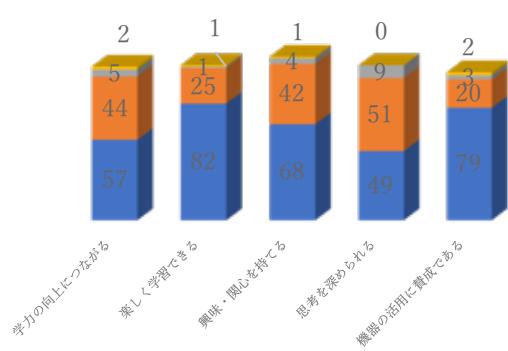
今日の授業を振り返って分かったこと、分からなかったことを書こう！
この頃から日本に鉄砲が伝わって、尊攘かびげんでも使われたなら、
暴力と武力だけで一気に天下をとるとはできなかつたのかなと思って思ひました。

③アンケート結果

【ICT機器の活用】

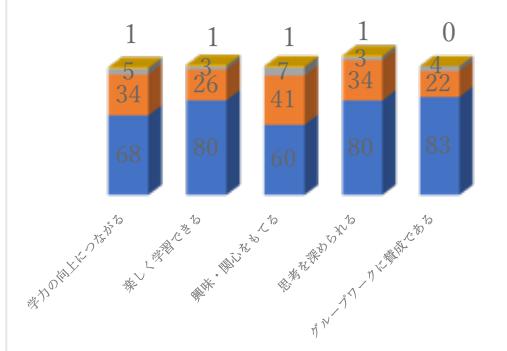
■そう思う
■どちらかというとそう思わない

■どちらかというとそう思ふ
■そう思わない



■そう思う
■どちらかというとそう思わない

■どちらかというとそう思ふ
■そう思わない



課題研究計画書

記入日：平成 30 年 8 月

学校名	和歌山市立紀之川中学校	氏 名	畠中 ちえな
担当教科・学年・組	1 年生 4 組担任（音楽科）		
研究課題 (研究題目)	• 互いに認め合い、自己肯定感を高められる授業づくりについて		
課題設定の理由 (問題意識)	<p>本校では、合唱コンクールが一大イベントとなっており、音楽の授業に対して意欲のある生徒が多い。一方で、必死に合唱に取り組むがゆえに、「音痴」とレッテルを張られている生徒や、自分で「音楽は苦手だ」と思っている生徒にとって居場所がないように感じる。</p> <p>こうした学校の雰囲気をふまえ、生徒同士が互いに認め合い、自分の居場所を見つけ、自信を持つことにつながる授業を研究したいと考えた。</p>		
研究目的	<p>音楽が苦手な生徒でも、授業の中で自分の存在価値を見つけ、意欲をもって学べる環境を作りたい。また、得意な子が苦手な子を批判するのではなく、それぞれの良いところを評価し合って、全員が自信をもって授業に取り組める雰囲気を作りたい。</p>		
研究方法・評価	<p>[研究方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 批判的な言葉を使わず、褒めることやアドバイスをすることを心掛ける。 • 発達段階に応じた言葉遣いをする。 • 生徒の発言を逃さずキャッチし、授業に参加していることを実感できるよう工夫する。 • 生徒全員ができる取り組みを行い、できる楽しさを味わえるよう工夫する。 • お互いの発表を聴き、褒めあう時間を設ける。 <p>[評価]</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自己肯定感と授業とのかかわりについてのアンケートを行い、評価する。 		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 1 月 21 日

学校名	和歌山市立紀之川中学校	氏 名	畠中 ちえな
担当教科・学年・組	1 年生 4 組担任（音楽科）		
研究課題 (研究題目)	互いに認め合い、自己肯定感を高められる授業づくりについて		
研究の達成状況	年度当初に比べ、生徒の自己肯定感を高められる授業展開ができるようになった。苦手は完全に解消されたわけではないが、「苦手だけど楽しい」と感じる生徒を増やすことができた。		
研究達成に関しての根拠・証明等	<p>担任している学級 30 人に、音楽の授業に関するアンケート調査を行った結果、「授業の中で、苦手な活動がある」と答えた生徒は 15 人（50%）であった。それに対し、「音楽の授業が好き」と答えた生徒は 27 人（90%）となり、苦手な活動があっても授業は好きだと感じている生徒が多いことがわかる。</p> <p>また、「音楽において、以前より自信がついたと思う」と答えた生徒は 20 人（67%）となり、研究に取り組んだ成果がある程度得られたと考えられる。自信がついた理由としては、「楽譜の読み方を初めて理解できたから」「合唱の練習の時に、いい声だと褒めてもらったから」「みんなで力を合わせてたくさん練習したから」「友達に褒められたから」「難しいパートを歌えるようになったから」の記述回答を得られた。</p>		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<p>音取りやパート練習では、歌が苦手な生徒を、ピアノの音がよく聞こえる位置に自然に移動させ、ゆっくり指導した。正確に歌えたり、いい声が出たときには、個人名をつけて褒め、なるべく全員を褒めることができるよう意識した。</p> <p>また、生徒のつぶやきを拾うように心がけ、授業の内容につなげた。授業が終わった後も、「集中できていたね」などの言葉掛けをした。</p> <p>得意・不得意の差が大きかったため、楽譜の読み方や記号について特に丁寧に指導し、得意な子が苦手な子に教えてあげる「学び合う」体制を作った。</p>		
当研究に関する 課題と展望	合唱やグループ学習で、生徒同士が協力する活動は成功したが、「互いに認め合う」ということを考えると、生徒同士が評価し合ったり、いいところを褒め合ったりする時間が少なかったと感じる。今後は、生徒同士のコミュニケーションを増やしていくような授業づくりをしていきたい。		

課題研究計画書

記入日：平成 30 年 8 月 31 日

学校名	和歌山市立西浜中学校	氏 名	古井 貴也
担当教科・学年・組	数学科 1 年 3 組担任		
研究課題 (研究題目)	生徒が主体的に学習を進めるための授業づくり ～課題設定とグループ活動の点から～		
課題設定の理由 (問題意識)	本校の教育重点目標は、「自ら学び、ともに生きる」であり、めざす生徒像に「すすんで学び、考える」という努力目標がある。これを達成するためにも、生徒が主体的に学びたいと思うような授業にしていく必要がある。数学的な見方・考え方を働きかせ、数学的活動を通して、自分の考えやわかったことをグループで話し合い、自分の考えを深めることなど数学のよさを感じ、日常生活に応用できるようにさせたい。		
研究目的	どのような課題設定にすれば、生徒が授業に意欲的に取り組むことができ、主体性をもちながら問題解決に向かうことができるのか考えていく。また、グループで考えを共有する場合には、どのような課題や場面が効果的なのか研究していく。		
研究方法・評価	方法としては、授業での振り返りの時間で、振り返りシートに「目標が達成できているのか」「どれだけ課題に対して解決できたのか」を書かせ、「取り組みの状況」などを生徒自身でも確認し、教師側も把握に努めていく。その結果を基にして、次回以降の課題設定づくりにつなげていく。 評価は、振り返りシートの記述内容や、グループ活動での様子（自分の考えを発信し、他者の考えを訊けているか）を参考にする。		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 2 月末日

学校名	和歌山市立西浜中学校	氏名	古井 貴也
担当教科・学年・組	数学科 1 年 3 組担任		
研究課題 (研究題目)	生徒が主体的に学習を進めるための授業づくり ～課題設定とグループ活動の点から～		
研究の達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 課題内容は、「易しい→難しい」「課題 1 の解決法を利用して、課題 2 を解く」など、数学を苦手としている生徒も取り組みやすいように設定した。 グループ活動を、1 学期に比べて多く取り組むことができ、生徒たちで考えようとする姿勢がよくみられた。 考え方や解き方が複数通りできる課題も設定し、グループで考え、クラスで共有することができた。 		
研究達成に関しての根拠・証明等	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動では、活発に取り組むことができ、「なんで?」「どうなるのかわからない」など、自分から課題に対して向き合う様子もみられた。また、グループ活動で新しく出た疑問を発言したり、それらを次につなげようとしたりする意識が出てきた（資料 1.）。 		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<ul style="list-style-type: none"> 視覚化したものを用意し、導入や展開を大事にした。（資料 2. ①～③） グループ活動を基に、全体への発表の機会を設けた（資料 3.）。 生徒自身が、本時の課題に対して自己評価できるように、振り返りシートの記入を行った。（資料 4.） 		
当研究に関する課題と展望	<p>【課題設定】不必要的課題（課題 2 につながっていない、容易すぎる、振り返り過多など）も多かったので、課題内容を精選していく必要がある。</p> <p>【グループ活動】課題に対して、グループ活動で、何をすべきなのか伝わっていなかつたり、指示があいまいで生徒が混乱していたりすることがあった。生徒の学ぼうとする姿勢・意欲はあるので、指示内容を明確にしなければならない。</p>		
その他（新たに生まれた課題・問題意識等あれば）	<ul style="list-style-type: none"> 「めあて」と「まとめ」の整合性がとれていなかつたり、「めあて」が漠然とし過ぎたため、焦点化できていなかつたりすることがあったので、「まとめ」につながる「めあて」の設定についても考えていく必要がある。 生徒が他者への説明で、数学的な用語を使ったり、道筋や過程をさらにわかりやすく伝えたりできるように支援をしていく必要がある。 		

【H30.和歌山大学教職大学院 初任者研修履修証明プログラム】

資料1. 振り返りシート

10月17日(火) 晴			
めあてを達成できなか った原因(複数)	よくできた	できた	あまりできなか った
自分に教わること	よくできた	できた	あまりできなか った
今日の授業でのまとめや振り返って分かったこと、分からなかったことを書こう！ 負の数の比例式 でも、成り立つことがわかった。喪れたりです。 比例 があるということは、比例式はあるかなくらいです。			

(12)月(4)日	初めて平行回転・対称移動を利用すね
初めてを達成できたか	よくできました
練習時間(時間)	よくで見た できました
教科でできること	よくできました できました

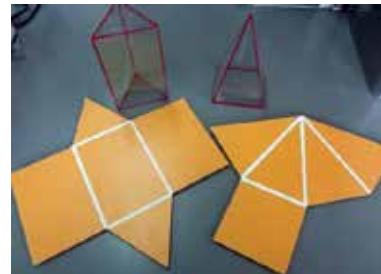
今日の授業でのまとめや振り返りで分かっここと、分からなかっこことを書こう！

平行・回転・対称・移動の重力の川頃はんがちがっても同じいちばんのかなと思いました
いくこども!! 良い風景や!!

資料 2. ①



資料 2. ②



資料 2. ③



資料 3



資料4. 振り返りシート

（？）月（？）日（？）時限目			
のあのの達成度	達成できた	少し達成できた	達成できなかった
課題問題（課題）	よくわかった	わかった	わからなかった
自分で考えること	よくできた	できた	できなかった

今日の授業でのまとめや疑問を書いて分かったこと、分からなかったことを書こう！

赤文字の①②③④を元に、自分なりに問題を考えてみよう。

（？）月（？）日（？）時限目

（9）月（7）日（5）時限目				
のあてを進度できたか	よこせた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
練習問題（算数）	よこせた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
自分で覚えること	よこせた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった

今日の授業でのまじめや取り扱って分かったこと、分からなかつことを書こう！

質疑的な眼をきかうかがくべくできるし、慣れている「けれど、」

教養的な眼をきかうかがくあとからすぐに確認できるし、

便利だなあ。と思いました。

4/1月/5日 終わりに反比例のグラフを書いて				
ためては通じでできたり	よくで出来	できた	あまりでできなかつた	ほとんどでできなかつた
解説問題(問題)	よくで出来	できた	あまりでできなかつた	ほとんどでできなかつた
自分で考えること	よくで出来	できた	あまりでできなかつた	ほとんどでできなかつた

今日の授業でのまとめや振り返りで分かったこと、分からなかったことを書こう！

反比例の関係は、どの値が大きいと、どの値は小さい。

反比例関係は、グラフが小さいとき、どの値が大きくなるかが分かった。

12月6日(水)午前：個体の表面積を求める				
初めて達成できたが 課題問題(誤解)	よくできた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった
自分でできること	よくできた	できた	あまりできなかった	ほとんどできなかった

今日の授業でのまとめや振り返りについて分かったこと、分からなかったことを書こう！

円錐の表すうさに上昇する力が弱いのがあることに気がかりました。

直面全体の面積と側面積を求めるには直面積が求められることかかります。

課題研究計画書

記入日：平成 30 年 9 月 25 日

学校名	藤戸台小学校	氏 名	繁 侑里
担当教科・学年・組	3 年生 2 組担任 (社会)		
研究課題 (研究題目)	子供が課題に向けて、主体的に活動に取り組み、楽しんで学べる授業づくり ～課題解決に向けての話し合いの充実を通して～		
課題設定の理由 (問題意識)	これまでの授業では、課題に対して教師の発言や説明が多かった。そのため、子供が主体的に解決しようとする姿があまり見られなかった。クラスの子供は、どの教科においても興味・関心が強く、自分で調べたことや考えたことを発表することが好きなようである。しかし、ただ発表するだけになってしまい、課題解決へ向けて深く考えることができていなかったので、ただの発表会になるのではなく、話し方名人・聞き方名人をマスターし、自分の発言を友達の考えと繋いで発表したり、質問したり付けたしをする話し合いをし、子供でつくる授業にしたい。また、ICTへの興味も強いため ipad 等の ICT 機器を有効に使い楽しんで学べる授業づくりを目指したい。		
研究目的	子供が課題に向けて、話し合いの場で友達の意見と繋ぎ合わせて主体的に考えを発表し、最初持っていた考え方と話し合いを通しての考え方の変容や気付きを持つことができる授業づくりとはどのようなものかを明らかにしたい。そのため、導入とまとめ振り返りを行い、子供の変容をみていきたい。		
研究方法・評価	課題を研究するにあたって、まず、子供の発表の仕方の充実を図りたい。そのため教室に話し方名人・聞き方名人の掲示物をして発表の仕方の基礎を作っていく。話し合いの授業においては、板書をうまく使い、子供の発言を色を変えて見やすくまとめたり、繋がりのある意見には矢印を使ってつなげたりするなど視覚的に分かるよう工夫する。また、全員発表を目標とし、手の挙げ方（付けたし、質問、反対）の意識づけを図りたい。 評価方法としては、授業で発表ができていたか、その発表は友達の意見と繋ぎ合わせられているか、全員が授業に参加できていたかを見るために板書を写真に残しておく。また、振り返りから子供の変容があったのか、楽しい授業であったのかを評価する。		

課題研究「成果報告書」

記入日：平成 31 年 1 月 16 日

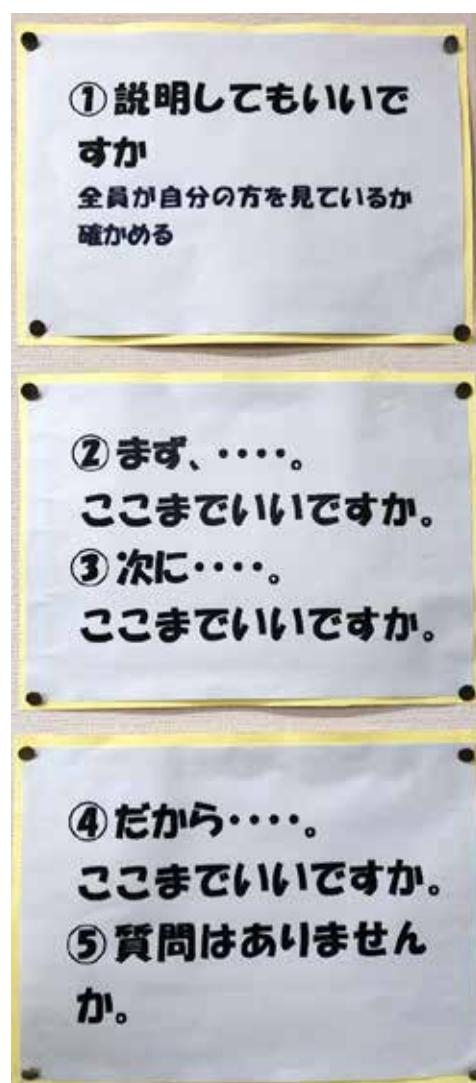
学校名	ふじと台小学校	氏名	繁 侑里
担当教科・学年・組	3 年生 2 組担任 (社会)		
研究課題 (研究題目)	子どもが課題に向けて、主体的に活動に取り組み、楽しんで学べる授業づくり ～課題解決に向けての話し合いの充実を通して～		
研究の達成状況	話し合いでは子供たちが「つなぎ言葉」を使って、友達の意見とつなげて上手に発表することができた。また、話し合いの足あとを残すことで自分の考えの変容に気付く子供もいた。しかし、現状として課題に主体的に取り組む児童は一部である。		
研究達成に関しての根拠・証明等	(資料 1) 教室掲示。話し合える場をつくるために「話す」「聞く」の姿勢が崩れてきたときや発表の仕方を確認するときに活用した。 (資料 2) 教室掲示。発表するときに、全員が理解できるような話し方を確認するときに活用した。 (資料 3) 教室掲示。子供がこれまで話し合ったことを確認したり活用したりできるように、単元の流れを掲示した。		
課題研究に関して行った工夫・手立てや具体的な実践事例等について	<ul style="list-style-type: none"> ・子供がこれまでに話し合ったことを確認したり活用したりできるように、今までの話し合いの流れを掲示した。 ・授業のなかで、友達の意見を上手につなげて発表できている子供に「○○さん、つなぎ言葉を使って上手に発表できていたね！」と具体的に褒め、周りの子供も良い方向に巻き込むようにした。 ・授業のなかで、「ああ、なるほど。」「わかった！」など、友達の意見を聞いて反応している子供をその場ですぐに褒めた。 ・授業の導入や展開のなかで、iPad やパワーポイントなどの ICT 機器を活用して、子供の興味付けを行った。 ・全員が話し合いに参加できるように、事前にノートに自分の考えを書き、教師が回収し、よく考えることができている意見に線を引き、コメントを書いて返した。授業の中では自信を持って発表ができるようにした。 ・子供が主体的に活動に取り組めるように、本時の課題を子供が考える時間を設けた。 		
当研究に関する課題と展望	課題に向かって日々取り組むことで、子供が主体的に取り組み、子供も教師自身も楽しんで学ぶことができていたと考える。しかし、全員参加で話し合いをしたり、話し合いを通して自分の考えの変容に気付くことができたのは一部の児童だけである。全員が参加するためにはまず自分に自信を持つことが必要であると思う。考えが書けている子供には机間指導のなかで褒めたり、みんなに紹介したりしたい。また、変容に気付くために、振り返りをしっかりと書くことや発表で「今まで～だと思っていたけれど、○○さんの意見を聞いて～」など発表の仕方を指導していきたい。		

(資料 1)

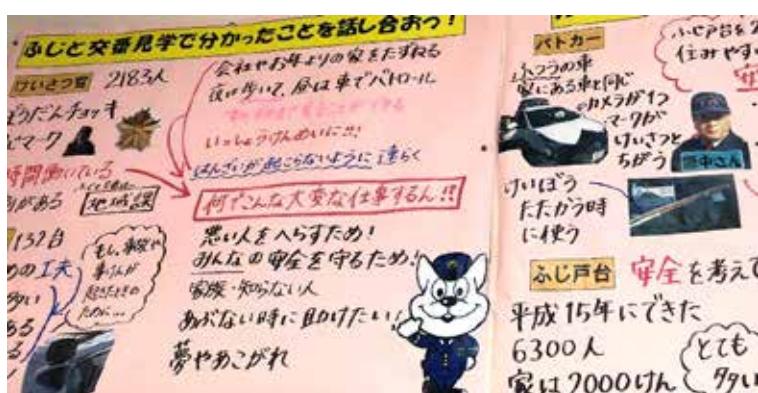


(資料 2)

(資料 2)



(資料 3)



III アンケート調査結果の概要

III アンケート調査結果の概要

豊田充崇（和歌山大学教職大学院）
貴志年秀（和歌山大学教職大学院）

1. はじめに

当調査は、和歌山県教育委員会並びに和歌山市教育委員会の協力のもと、連携協力校7校の学校長、拠点校指導教員、校内指導教員、初任者及び2年目・3年目の教員を対象に、本プログラムの考察・評価と改善・充実という視点から実施した。

2. 調査の目的と内容

当調査の主たる目的は、本プログラムの実施内容や実施方法と成果や課題との関係性を捉え、本プログラムの目標がどの程度達成されているかを可能な限り把握することにより、本プログラムの考察・評価を行うとともに、その改善と充実を図ることにある。

また、調査結果の考察を通して、「適切な初任者研修のあり方」、「初任者・2～3年次教員の成長を支える環境のあり方」の追求に役立てることができればと考えている。そのため、初任者への指導的立場にある学校長、拠点校指導教員、校内指導教員に対しては、「学び続ける教師」の育成という観点から、校内環境づくり（指導体制を含む）などに対する考え方、初任者の成長とその要因、協力校の教員や研修に対する影響、ならびに本プログラムへの要望等についてリサーチすることとした。また、初任者及び2・3年次教員に対しては、「学び続ける教師」へと成長するために重視している点、初任者の成長をどう捉えているか、校内カンファレンスの評価や校内研修への影響等について調査を行うこととした。

3. アンケート調査結果

学校長7名・拠点校指導教員4名・校内指導教員11名・初任者教員10名から得た回答結果を以下に記す。

3.1 「学び続ける教師」として重要と考えられる点について

まず、下記の3者に対して、「学び続ける教師」として成長していくための取り組みについて、自由記述で回答を得た。

(学校長向け設問) 初任者や若手教員が「学び続ける教師」として成長していくために、貴校が重要と考え取り組まれていることは何ですか。

(拠点校指導教員・校内指導教員向け設問) 初任者や若手教員が「学び続ける教師」として成長していくために、あなたが重要と考え取り組まれていることは何ですか。

(初任者教員向け設問) 「学び続ける教師」として成長していくために、あなたが重要と考え取り組まれていることは何ですか。

自由記述には、「組織の一員である事を自覚し、教科間、学年間、学校全体で連携を図る事を常に意識する」ことや、放課後の校内カンファレンスをより充実したものとするため、研究授業参観の機会を増やすことなどで、「教員同士がともに学び合う風土」を校内に形成する

ための配慮をおこなっているとの趣旨の回答が多く見られた。これらの学校長からの回答で共通していることは、やはり授業力向上及びそのための授業研究を重視されていることである。もちろん、子供理解、学級経営、同僚性なども重視しているが、それらも授業実践の基盤としての捉え方であった。

また、「日々の実践の中で出てきた課題や悩みに的確なアドバイスを与え、壁を乗り越えさせ、達成感を積み重ねていくことによって自身の成長を実感させる雰囲気を職場の中に生み出すよう気を配っている」といった記述からも、学校長は初任者教員の育成のために、こういった「教員同士がともに学び合う風土」を意図して校内に構築していることがうかがえる。

拠点校指導員からの回答においても、やはり授業実践力や学級経営の力が重視され、そのための具体的な指導が行われていることが分かった。

その際に、「常に謙虚な姿勢で受け止め、学び続けようとする意志を持つこと」、「チーム学校、組織の一員として他の教職員と連携を図っていく」ことに留意しつつ指導していることも記述されていた。学習指導要領は一定期間で改訂されていくが、その改訂の趣旨を理解するためには、教師が学び続けるのが当然であり、「常に教師自身が時事的・社会的事象に関心を持ち理解しておく必要がある。」との指摘もあった。単に、ベテラン教員から初任教員に授業のノウハウを直伝するのではなくて、他の教員との連携を重視したり、目前の授業実践だけではなく、今後の教師としてあるべき学び方の姿勢までを意識して指導されている拠点校指導員の姿がうかがえた。

さらに、「自分の持っている特長を知り、それを生かした学級経営、授業作りができるよう、長所や良かった点は必ず伝えるように心がけている」との記述もあり、拠点校指導教員は、その指導の厳しさの反面、良き理解者・相談者として的一面も兼ね備えた存在であることがわかる。「仕事にやりがいを感じ、もっと力量を高めたいという気持ちを持つことが成長の原動力になる」との言葉からも、初任者の励みにつながっていることも確かである。

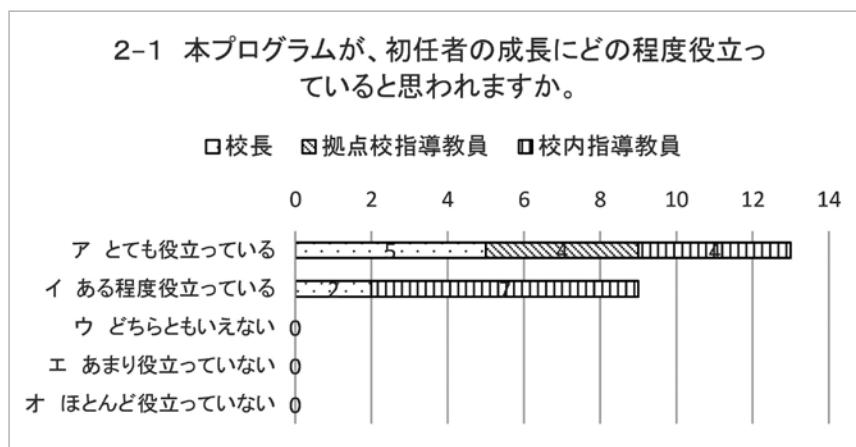
校内指導教員の多くは、初任者に対して「様々な先生方の授業を拝見させてもらい、自らすんで授業をおこない、周りの先生方の意見を聞くこと」が授業力向上のための基本原則であることが述べられている。その際の助言やアドバイスを素直にきく姿勢・謙虚な態度が重要であること、「失敗しても、反省して次に生かしていくべき」という思い切りも大事だというような、自らの経験から判断した力強い文体での回答が多かったといえる。

「若手の先生や初任者の先生方が経験を経て、後輩ができた時に同じように引き継いでいいってもらいたいという思いがある」との回答からは、同僚性の重要さがうかがえた。近年、授業指導技術のノウハウ本が多数出版されており、授業実践のアイディアがインターネットで簡単に入手できる時代ではあるが、やはり職員全体の学ぼうとする姿勢や雰囲気が教員の成長を促す手立てになることは間違いないといえる。

なお、初任者の回答にも共通性が多く、「日常的な教材研究を怠らないこと」が最も重視されている。今年度の特徴としては「自らの授業を振り返る（子どもたちに理解できたかを確かめる）」、その上で、自ら授業の改善を日々意識していくことが重要との記述が多々みられたことである。

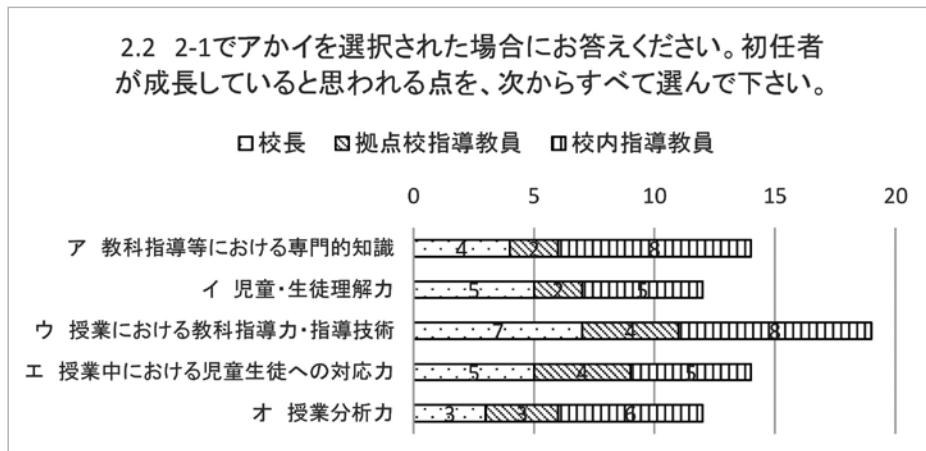
また、例年の傾向であるが、「授業づくり」については、「周りの先輩の授業を見せてもらひ、少しづつでも真似して取り入れる。」「多くの先生方のアドバイスを聞き、良いなと思うことをすぐに取り入れ実践する」といった謙虚な姿勢がうかがえた。「カンファレンスで助言して頂いたことを実践する」という記述もあり、校内の先輩教員の授業を見て学び、自ら実践して振り返り、そして周りからの助言に耳を傾けるといった好循環が構築されている状況がうかがえた。「学び続ける教師」というキーワードは記述されていなかったが、常にまわり（教師集団）から学ぶ姿勢を持つといった回答が多かったことは、学校組織の一員として、成長できる環境にあるということの現れであろうと考えられる。

3.2 初任者の成長について

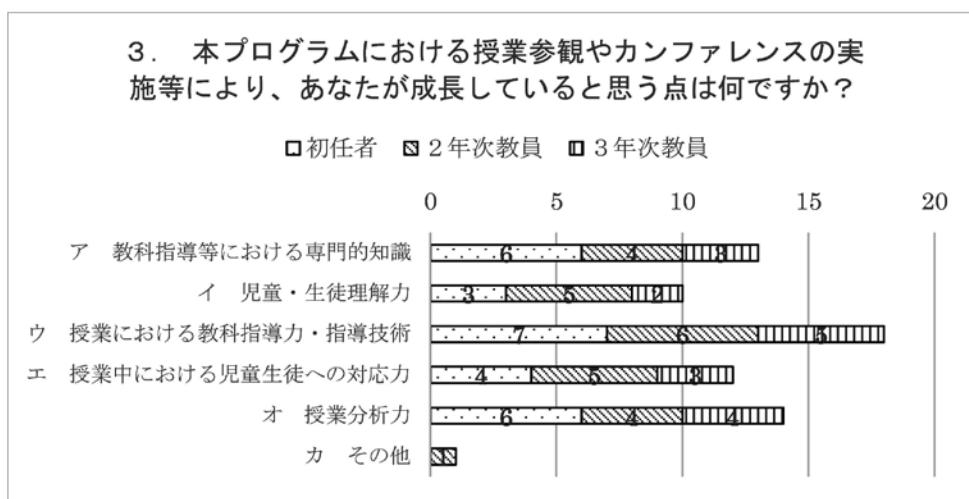


上のグラフに示されたように、学校長、抱点校指導教員とともに、「初任者研修プログラム」が「とても役立っている」「ある程度役立っている」との回答を得た。特に5校の学校長がア（とても役立っている）と回答している点と、抱点校指導教員全員が同様に回答している。また、学校長・抱点校指導教員・校内指導教員ともにウ・エ・オのようなマイナス評価は無く、これは例年に引き続いていることである。

以下のグラフは「2-2 初任者が成長していると思われる点」について、3者（学校長5名・抱点校指導教員4名・校内指導教員11名）の結果を比較したものである。



この2-2のグラフによると、初任者の「授業における教科指導力・指導技術」について、校長・拠点校指導員の全員から「成長したと思われる」との回答を得ることができた。これは3年連続同じ結果となっている。当初任研プログラムでは「実践力向上」を第一の目標に掲げており、特に「授業実践力の向上」については、毎回の初任者授業参観後にカンファレンスを実施するなど、重点的に実施しているため、3年間連続の価値ある結果といえるだろう。なお、校内指導教員からも11名中8名がこの項目を選んでおり、初任者が最も顕著に成長した点であると捉えられていることがわかる。



(※2, 3年次教員は、「初任の頃のあなたと比べ成長していると思われる点は何ですか？」との設問)

上記3. のグラフは、初任者・2年次・3年次教員の結果であるが、やはり「ウ 授業における教科指導力・指導技術」が最も高い結果となっている。ただ、2-2のグラフと比較すると、「校長・拠点校指導教員・校内指導教員」の「オ 授業分析力」との差がみてとれる。これは例年の傾向であるが、初任者への指導側からみると、授業分析力はまだまだ初任者に身に付いていないとの判断であるが、初任者らの自己評価としては比較的高い結果となっている。授業分析力の認識に大きな違いがあるのは、初任者は大学での初任研プログラムにおける講義（授業・教材研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ等）で、示範授業や模擬授業について実施したり、授業分析のワークを日々実施しているため、これらの経験上、「授業分析力」を獲得しているとの認識を得ているのだと思われる。

なお、2-2および3のグラフの双方で、「児童・生徒理解力」が課題になっている点も例年同様である。これは、児童・生徒理解力が向上すればするほどに、子どもたちの深い部分を捉えることができるようになり、さらに理解力・対応力の必要性に迫られるといったことも考えられるため、一概に「向上した」とは回答しづらい項目であることは確かである。基本的な授業実践上の指導技術の向上は捉えやすいが、子供理解・対応においては、やはり年間を通じてより困難さを増す場合もあり、その力量が向上していたとしても、理解力・対応力不足を実感する場面を経験していくこともあるからだと思われる。3年を経て、同様の傾向が捉えられたため、次年度への引き継ぎ事項（配慮するべき点）として重視したい。

4. 成長の理由として考えられる点は次のうちどれがあてはまりますか。	初任者	2年次教員	3年次教員	校長	拠点校指導教員	校内指導教員
ア 日々における自己の教育実践	4	6	3	7	3	8
イ 自己研修	1	2	1	4	3	5
ウ 校外研修	2	3	4	2	2	5
エ 校内研修	2	3	5	3	3	8
オ 管理職の指導	5	4	3	0	2	0
カ 拠点校指導教員の指導	8	4	0	3	3	5
キ 校内指導教員の指導	3	4	4	1	2	4
ク 同僚による指導	7	8	5	4	3	5
ケ 大学教員の指導	9	8	5	5	4	7

4. の表は、初任者の成長要因と考えられる項目を、それぞれの立場から問うた結果を示したものであるが、「初任者教員」は、「大学教員・拠点校指導教員からの指導」という回答が多く、次いで、「同僚による指導」となっている。逆に、「自己研修」によるものという回答が最も低かったが、これは例年の傾向と一致する。また、初任者は教員は、「管理職の指導」との回答が5となっているが、実際の管理職（校長）や校内指導教員からは、初任者の成長要因として捉えておらず、最も開きの大きい項目となった。初任者は、学校全体の組織づくりをおこなっている管理職の方々から間接的に学ぶことが多いと捉えているのではないかと考えられる。なお、自由記述からは「管理職の先生が授業を見学して指導してくれる・相談にのってくれる」という記述もいくつかみられるため、管理職による直接的な初任者指導も実際にはなされていることは確かである。

いずれにせよ、初任者教員の成長要因は多岐に渡っていることが捉えられる。なお、昨年に引き続き、拠点校指導教員の4名全員が「ケ 大学教員からの指導」を初任者の成長要因として回答いただけていることは幸いである。

自由記述からは、成長要因について、1つの大きな要因を見出すのではなく、初任者を支える校内の体制や、初任者の意欲・熱意によってその体制の中でコミュニケーションをとりながら日々の授業改善につなげる問い合わせをするなど、やはり複合的な要因が挙げられていた。例えば、「校内研修では、普段見ることのない同僚の先生の授業を見ることができ子供への対応や授業の進め方を実践的に学べる。素晴らしい授業を身近に感じることができ、自分の教材研究の意欲にもつながる」といった記述や、「授業を行うたびに、相談に応じてくれる指導教員の先生方や先輩方、大学教員の先生方から専門的なアドバイスをもらい、それをマネしてみたり少し変えて取り入れてみることで授業がスムーズに展開できる場面が増えてきた」といった記述からも、学びの多様性がうかがえる。

次に、初任者教員・2年次教員・3年次教員に「教育実践上の課題はどの程度明確になったか」について問うた回答結果を以下の5. のグラフで示すが、いずれも肯定的な結果となった。週1回のカンファレンスによって、初任者の抱える課題が明確になってきていることは確かであるといえる。

自由記述からは、週1回というカンファレンスで「何度も指摘される」ことで、自分の課題に明確に気づくとのことがみられ、「改善されているところ」が確認できたり、課題の指摘だけではなく、加えて励ましも得られるなど、カンファレンスでの学びが大きいことがうかがえる。

なお、「ある程度明確になった」との回答者が4名となっているが、この「ある程度」とい

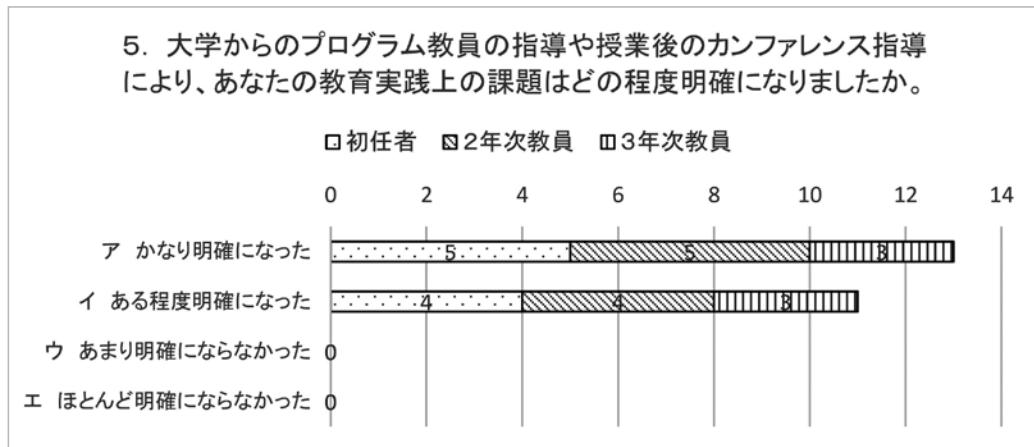
うのは、「自らの抱えている課題が多く、どれを課題として取り組むかが明確に見えてこないが、その中でも“ある程度”みえてきた」というニュアンスでの回答結果であると考えられる。以下「ある程度明確になった」と回答した初任者の自由記述を引用する。

「最初は課題がありすぎて自分でも整理することができないほどでしたが、カンファレンスではだんだんと言われることが絞られて、自分に足りないものが明確になりました。明確になってきた分、課題に対して時間をかけて解決に向かって励むことができたと思います。」

以下は「かなり明確になった」と回答した初任者の記述である。

「授業規律や授業構成力、めあて・課題の設定づくりなど課題がまだたくさんあることに気づかされました。その中でも「めあてとまとめの整合性・言い回し」は、いまだに自分の一番の課題であることがよくわかりました。3学期の授業では、1、2学期を通しての課題が明確になったことで、より成長できるように取り組んでいきます。」

このように、「かなり明確になった」と「ある程度明確になった」についての認識の差は、回答者の捉え方の差であると考えられるため、いずれの項目を選んだとしても大きな違いはないといえる。当プログラムに参加した初任者には、講師歴の長い方もいるが、全受講者(2, 3年次教員も含めて)、自らの課題に気づき明確になったという成果は注目に値するといえるだろう。



3.3 当プログラムによる学校への影響

(1) 拠点校指導教員・校内指導教員への影響

校内指導教員の学びにつながっているかを確かめるために、校長・拠点校指導教員そして校内指導教員向けの以下のようないきを設定した。

- ① **校長向け**：「校内指導教員が指導助言者として授業後のカンファレンス指導に参加することで、どの程度成長したと思われますか」
- ② **拠点校指導教員向け**：「授業後のカンファレンス指導等に参加することで、拠点校指導教員として初任者に対する指導にどの程度役立ったと思われますか」
- ③ **校内指導教員向け**：「本プログラムに参加すること指導教員としてのあなたの学びにどの程度役に立ちましたか。」

その結果、①校長向けのアンケート結果では、校内指導教員が「ア とても成長した(3)」、「イ ある程度成長した(3)」、「ウ どちらとも言えない(1)」となり、概ね良好な結果を得た。②拠点校指導教員に対しては、「初任者に対する指導」に、「ア とても役に立った(3名)」「イ ある程度役に立った(1名)」とこちらも概ね良好な結果を得ることができた。

③校内指導教員からは、「ア とても役に立った(3名)」、「イ ある程度役に立った(6名)」、「ウ どちらとも言えない(2名)」となり、やはり概ね肯定的な意見だが、「ウ=どちらとも言えない」の回答が2名あった。ただ、この2名の校内指導教員は、その自由記述において、他の校務等でそもそも初任者授業の参観やカンファレンスへの参加が叶っていないということで、カンファレンス自体の中身が役立たないものであるという意味ではないと捉えられる。

授業参観やカンファレンスについては拠点校指導教員から以下のように好評価を得ている。

- ・「授業のビデオ、授業記録をもとに導入・展開・まとめの各段階で具体的な指導をおこなうことによって初任者にも次にどう改善していけばいいかということがつかみやすいと思われる。」
- ・「授業評価シートには、どういう観点で授業を見れば良いのかが示されており、大変役に立った」

また、拠点校指導教員自身についても学びがあったことが以下の記述からもうかがえる。

- ・「カンファレンスは有意義である。多くの専門的な視点で授業を評価したり吟味したりして、拠点校指導員としても幅広い見方・考え方に対する接することができた。初任者の課題が明確になる良い機会であった。」

更に、以下の記述からは、カンファレンス以外の日の初任者指導にも役立っていることがわかる。

- ・「教職大学院の先生方と問題点を共有することができ、その課題に対して初任者が、その後どのように取り組んでいるのかを拠点校指導員として見ることができ日々の指導に活かすことができたと思われる」

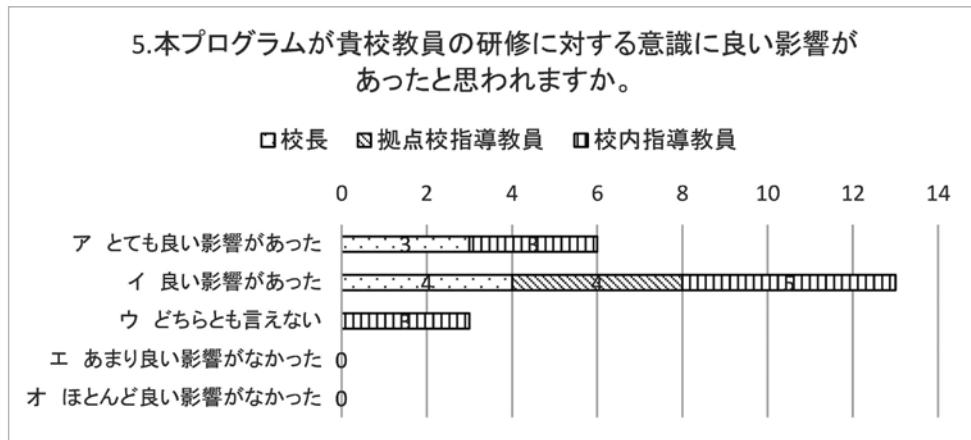
以上の結果から、本プログラムは、初任者以外に与える影響も大きいことがわかった。逆にいえば、学校教育現場のニーズ・課題を汲み取って指導に活かせば更なる効果を上げができるし、指導の方針が学校現場の意向に沿わなければ軋轢を生む可能性もあるため、実施側としても管理職・拠点校指導教員・校内指導教員の方々と、本プログラムの趣旨や指導方針、情報報告・共有の重要性が一層浮き彫りになったといえよう。

(2) 研修への意識の影響

最後に、5. のグラフは「教員の研修に対する意識に良い影響があったか」について問うた結果である。校長および拠点校指導教員は、概ね良い影響があったとの回答であった。しかしながら、校内指導教員の回答は、どちらとも言えないとの回答もあり、それぞれの立場で、本プログラムの影響の受け止め方が若干異なることがうかがえる。

校内指導教員の方々からは、本プログラムがきっかけとなり、「授業参観とカンファレンスへの参加によって、学校全体で学び合う環境や意識、関係をつくることができた」との成果が述べられている。また、「大学教員による専門的な指導内容を聞くことができ、本プログラム対象教員でなくても、自らの資質向上や実践に生かすことができた。」との記述からも、他

の教員への波及効果もうかがえる。さらに、「先輩教員として更に向上していこうという良い影響があったように感じました。」とあるように、前向きに取り組む初任者教員に刺激を受けた教員も少なからずいたことは確かである。



4. 本プログラムへの要望等

本プログラムの充実を図るうえで改善すべき点や要望事項について整理する。これまで述べてきたように、全体として高い評価を得ていることは確かではあるが、それ故に初任者に過度な負担を強いているのではないかという懸念が多かった。

例えば、校内指導教員からは「毎週、自習体制をとって授業を参観したり、教材研究を行ったり、カンファレンスにも参加と負担が大きいのは事実です。」「研修内容や研修プログラムを見てみると、大変負担が大きいものを感じます。そのために学級の子供たちと余裕の心をもって向き合い、じっくり学級の事を考えることができず、一番大切な学級づくりがおろそかになってしまわないかと心配します。」といった記述があった。1・2年目にも同様の過重負担軽減への改善事項が出されていたため、本プログラムの趣旨（履修証明等を含む）を損なわない範囲で、研修時間・訪問回数等の負担軽減を重ねてきたのであるが、それでもやはり当プログラムに参加する初任者の負担感を校内教員が感じ取っていることは事実である。

本年度も「研修の回数や日程、時間、内容等で初任者の負担が大きくなりすぎないような配慮をこれからも続けていただけないと嬉しい」といった記述が継続しており、当プログラムの成果を捉える一方で、その対象者にかかる負担度についても検証をこころがける必要がある。「働き方改革」が叫ばれている中で、過度な負担のかかるプログラムであってはいけないことは確かである。

内容面については、「授業と学級集団づくりは、密接につながっていると考えるので、校内カンファにおいて、授業改善の指導助言に加え、研修講座（学級集団づくり、学習規律、問題行動への対応…等）などを開設していただけると、さらにありがたい」との要望があった。本プログラムは、「授業実践力向上」を主軸に据えているが、「授業を進めるだけに労力を使いすぎているように感じた時もありました。」（学校長）との記述もみられるため、教育現場からの強い要望としての「学級集団づくり、学習規律、問題行動への対応」についても、バランスを保ちつつ時間を割りしていく必要性もあると考えられる。

IV 成果と課題

IV 成果と課題

1. はじめに

初任者研修履修証明プログラムを立ち上げて3年。今年度も昨年度と同様に初任者を対象とした研修はもちろん、2年次教員（昨年度の初任者）を対象とした研修も並行して行ってきた。

このプログラムに協力いただいた学校は、この3年間でのべ10校（小学校4校、中学校6校）、対象となった初任者は合計29名（小学校17名、中学校12名）になる。各校に配置された初任者、また2年次を迎える教員の研修を計画・実施することが本プログラムの大きな目的である。さらに、プログラム2年間の研修を終え、3年次を迎える教員の成長を見守ることも目的の一つであった。

初任者や2、3年次教員の成長については、教師としての「どのような力」を「どのような方法」で検証するのかが大きな課題でもある。この初任者研修プログラムでは、教師として必要な様々な資質や能力のうち、とくに“授業実践力”に焦点をあて、それを向上させるための手立てをプログラム化してきている。

具体的な取組内容としては、
・連携協力校における初任者や2年次教員の参観授業と校内カンファレンスでの授業の振り返り
・理論と実践の往還を重視した教職大学院での科目受講
である。

とくに大学での受講科目は、授業実践力の育成という観点から、初任者には「学校・学級経営Ⅰ」や「課題研究」をはじめ、授業の設定方法、展開方法、分析方法、評価方法、改善方法など「授業・教材研究」科目群の内容に特化しており、大学教員による示範授業や初任者の模擬授業、授業分析に係るワークなども多く実施された。

さらに2年次教員には「学校・学級経営Ⅱ」や「子どもの権利」などの集中講義を開催し、初任時の研修をさらに広げ、深める内容を盛り込んだ。

2. 初任者へ指導について

連携協力校へ月に3回程度訪問指導し、初任者の授業を参観、放課後の校内カンファレンスで授業の振り返りを行った。昨年度より訪問回数を減らした（月4から月3）のは、初任者の負担軽減を考えたこともあるが、この2年間の取組の反省から、初任者に授業準備（教材研究や教材・教具の準備等）の時間をじっくりとらせることが必要だと考えたからである。

初任者の行う授業については、

- ① 授業実践
- ② 振り返り
- ③ 課題の発見
- ④ 授業改善への練り上げ
- ▼ ⑤ 改善を意識した授業実践（翌週）

を一つのサイクルとし、それぞれの活動を大切にしながら一年間継続的に行ってきた。

また、校内カンファレンスでは、参観した授業の動画や写真、また教職大学院が作成した

授業評価シートを活用しながら、

- ・教師の身体的技術
- ・子どもへの対応
- ・学習環境
- ・教材研究、授業展開
- ・授業技術

の5観点から、初任者が主体的に授業を振り返り、改善されてきた点や当面の課題を明確にすると同時に、課題解決と授業改善への具体的な方策を拠点校指導教員や校内指導教員を交えて大学教員（プログラム教員や実務家教員）等とともに追求していく方法をとった。

実際の授業評価シートの観点は以下のようなものである。

教師の身体的技術	授業の心構え		教材研究・授業展開	授業技術	教材研究	発問	
	子どもへの対応	声			教科書	指示	
		言葉遣い			本時の指導計画	説明	
		話術			めあて	助言	
	表情・態度	ユーモア	学習規律		導入	発言の取り上げ方	
		目線			構成・時間配分	板書	
		表情			まとめ	ノート指導	
		立ち位置 立ち姿	学習環境		開始と終了	机間指導	
					省察	学習形態	
						教具	
						ICT	
						ワークシート	

図1:授業評価シート観点一覧

また、教職大学院の教員により毎週開催されている専攻会議では、担当者から各初任者の現状を報告、成長点や課題についての情報や意見を交換し合っている。その中で、初任者のさらなる成長や課題解決に向けた対応策の協議を行い、次回の学校訪問での授業参観や授業の振り返りの視点が明確化するように努めてきた。

さらに、月1回程度初任者を集めて行う教職大学院の授業では、初任者に共通する課題等に視点をあて、その授業内容や授業担当者、授業のテーマやポイントを柔軟に変更することで、初任者の実践的な教師力の向上と授業の基盤となる理論の習得に応えている。このことが、本プログラムの効果的な推進の大きな要因となっていると言える。

2. 初任者の成長について

このようなプログラムの過程を経て研修を続けてきた初任者は、当然、一般の初任者研修を経験した者より自己の成長をより実感できるであろうことは容易に理解できる。本プログラムの考察・評価、並びに改善・充実を図ることを目的としたアンケート調査においても、自身が成長したと感じる点を以下の表のように考えている。（図2）

成長の項目として以下の5点を挙げた。

- ア) 教科指導等における専門的知識
- イ) 児童・生徒理解力
- ウ) 授業における教科指導力・指導技術
- エ) 授業中における児童生徒への対応力
- オ) 授業分析力

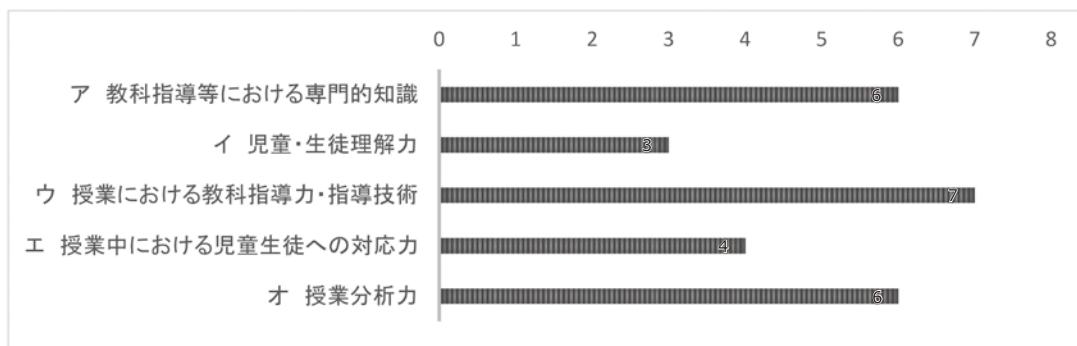


図 2：初任者が実感する自身の成長点

実際、校内カンファレンスや大学での科目受講を重ねるごとに、教材の深い読み取りや子どもも主体の授業づくりといった「授業における教科指導力・指導技術」については、担当の教員も初任者の成長を認めている。しかし、子ども一人一人の特性を把握する「児童・生徒理解力」や子どもの発言やつぶやきをどう授業の中で活かしていくか等の「授業中における児童生徒への対応力」に関しては、ある程度の向上はみられるものの、なかなか思うようにはいかないというのが初任者の認識のようである。

そこで、初任者の感じた自身の成長と校内で初任者を指導する立場の先生方（学校長・拠点校指導教員・校内指導教員）の見た初任者の成長を比較しながら、本プログラムの成果と課題について確認したい。

ア) 教科指導等における専門的知識について

初任者の10名中6名が成長項目に挙げ、この1年間の自身の成長を感じている。（図2）

しかし、初任者の行う授業を一番数多く参観し、その指導を行っている拠点校指導教員は、さほどその成長を認めていない。（図3）

これは教科指導等での実践経験が豊富で、高い専門的知識をもつ拠点校指導教員からすれば、教師に求められる専門的知識には一定レベルが必要という考えに加え、教材研究を重視した授業づくりや学び続ける教員の視点から、より高い「教科指導等における専門的知識」の習得を期待しているものではないだろうか。

初任者は校内カンファレンスの振り返りを通して課題の明確化を図り、授業の工夫・改善に取り組む中で授業実践力の向上に努めている。しかし、拠点校指導教員など経験豊富な教員から見れば、大学での講義内容や校内カンファレンスでの振り返りはまだまだ実践では活かされていない、あるいは直面している授業上の課題の解決を十分には図っていないなど、授業実践力における成長には一定の厳しい評価をしている。とくに小学校の場合、一部の教科等における授業実践力の向上は認めるものの、教科等全般における成長という点で、今後さらにその努力を期待していると言えるのではないか。

しかしながら一方で、初任者が自身の授業実践力の向上を実感することは、授業改善への

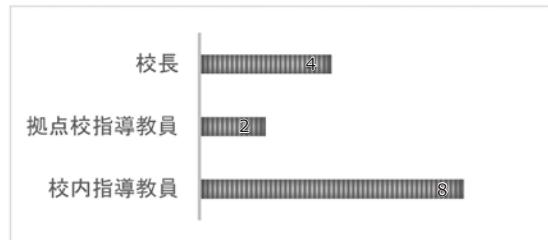


図 3：教科指導等における専門的知識

意欲、教師としての自信、さらには学び続ける教員への成長につながるものである。こうした点から考え、初任者の多くが授業実践力の向上を実感していることは、本プログラムの成果の一つに挙げることができる。

イ) 児童・生徒理解力について

アンケート項目の中で初任者自身の採点がもっとも辛かつた項目である。

学校長や校内指導教員が初任者の子ども理解の力がある程度つけてきたと評価しているのに対して、拠点校指導教員の評価は初任者と同じように低い。(図4)

初任者が授業を行う各クラスには様々な子どもたちがいる。近年、個別支援や配慮必要な児童生徒の数も増え、その対応に苦慮する教員も多くなっている。初任年度にそういう子どもたちに会うと、どうかかわってよいかわからず思い悩むことが多いのも現実である。これを克服するためには、多くの経験と子ども理解についての知識が必要となる。大学での授業で様々な児童生徒への対応の仕方を学んだり、拠点校指導教員など経験豊富な先輩教員から、個々の子どもたちへの接し方を学んだりすることが大切であろう。

考え、初任者の多くが授業実践力の向上を実感していることは、本プログラムの成果の一つに挙げができる。

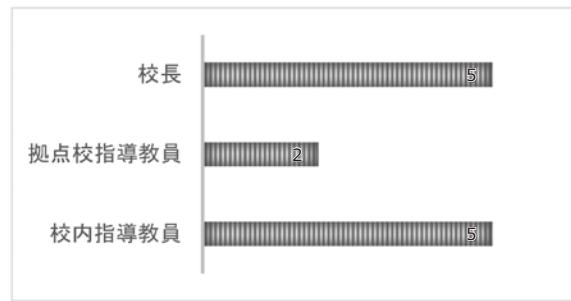


図4：児童生徒理解力

ウ) 授業における教科指導力・指導技術について

学校長や拠点校指導教員、校内指導教員のいずれもがその成長を認識している。

(図5)

初任者は年間二十数回におよぶ参観授業とその振り返りを中心に、授業改善を図り着実に教科指導力・指導技術を向上させてきた。

また、大学での初任者同士による模擬授業の実施、大学教員による示範授業の参観と自身が先生役や子ども役になって、授業づくりについて議論し、「よい授業」「わかる授業」について考え、体験してきた。この繰り返しが初任者の教科指導力や指導技術を向上させてきたのではないか。

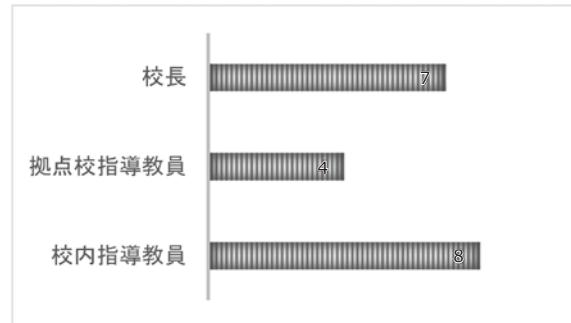


図5：授業における教科指導力・指導技術

エ) 授業中における児童生徒への対応力

イ) の児童・生徒理解力とともに初任者自身の評価の低い項目である。拠点校指導教員を始め指導者側も一定の成長は認めているものの、初任者が子ども一人一人の性格や仲間関係、

理解力や表現能力などの実態を踏まえた授業展開や、子どもたちの発言を取り上げ、他者の発言へつなげ、学級全体にそれを広げ深める対応力といった点において一定の課題があるという認識のようだ。(図5)

多様な学習形態による子ども主体の授業を展開するうえで、教師の「授業中における児童生徒への対応力」は極めて重要である。

校内カンファレンスでの授業の振り返りや指導助言、教職大学院での授業内容において、「授業中における児童生徒への対応力」の向上にいっそう配慮する必要がある。

才) 授業分析力

授業後毎回行われるカンファレンスで、初任者は必ず自身の授業についての振り返りを行っている。

iPadで撮った授業風景の動画や授業評価シート、授業記録などを活用して自身の授業を見直すことで、初任者は授業の振り返りを容易にかつ主体的に行えるようになる。1学期に自身の授業についてほとんど振り返りを行えなかつた初任者も、3学期にはある程度の観点をもって授業分析ができるようになるのは事実である。しかし一方、学校長や校内指導教員の評価はそれほど高くない。(図5)

客観的に初任者の授業分析力を評価すれば、まだまだ一定のレベルには到達していないのであろう。教職大学院が作成した授業評価シートの評価基準を明確にし、これを一層活用することで初任者の授業分析力を高めていきたい。

3. 2年次教員の成長について

1年間の初任者研修を終え2年次を迎えた教員は、その成長ぶりが高く評価できる。授業技術の向上はもちろんあるが、子どもへの対応力、教職員間のコミュニケーション力等、教員として必要な資質・能力が見違えるほど向上している。1年間の大学の講義や研修で学んだことを、自身の授業や学級づくりの中で活かすことができるようになってきたのである。

以下、今年度で2年目を迎える教員の授業を分析した授業評価シート(前出;図1)を紹介する。いずれも2年次教員である。

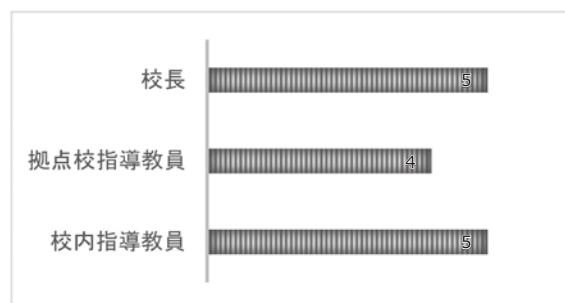


図6: 授業中における児童生徒への対応力

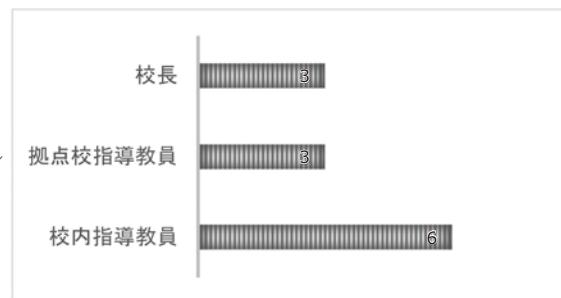


図7: 授業分析力

【小学校 A 教諭】初任年度 5 月

観点		評価	観点		評価	観点		評価	観点		評価
教師の身体的技術	授業の心構え	1	子どもへの対抗	対応の仕方	1	教材研究・授業展開	教材研究	1	授業技術	発問	1
	声	2		ほめ方	2		教科書	1		指示	1
	言葉遣い	1		配慮の仕方 (支援を要する子)	1		本時の指導計画	1		説明	2
	話術	2		学習規律	1		めあて	1		助言	1
	ユーモア	1		学習環境	1		導入	1		発言の取り上げ方	2
	目線	1	学習環境	構成・時間配分	1		まとめ	1		板書	1
	表情	1		開始と終了	0		省察	1		ノート指導	1
	立ち位置 立ち姿	1						机間指導		1	
								学習形態		2	
								教具		2	
								ICT			
								ワークシート			

【小学校 A 教諭】2 年次年度 5 月

観点		評価	観点		評価	観点		評価	観点		評価
教師の身体的技術	授業の心構え	3	子どもへの対抗	対応の仕方	3	教材研究・授業展開	教材研究	3	授業技術	発問	3
	声	4		ほめ方	5		教科書	2		指示	3
	言葉遣い	3		配慮の仕方 (支援を要する子)	3		本時の指導計画	3		説明	3
	話術	3		学習規律	3		めあて	4		助言	4
	ユーモア	2		学習環境	3		導入	4		発言の取り上げ方	3
	目線	4	学習環境	構成・時間配分	3		まとめ	3		板書	4
	表情	3		開始と終了	4		省察	3		ノート指導	3
	立ち位置 立ち姿	4						机間指導		4	
								学習形態		3	
								教具		3	
								ICT		4	
								ワークシート			

図 8:授業評価シート比較（初年度→2年次）①

【中学校B教諭】初任年度11月

観点		評価	観点		評価	観点		評価	観点		評価
教師の身体的技術	授業の心構え	2	子どもへの対抗	対応の仕方	2	教材研究・授業展開	教材研究	2	授業技術	発問	2
	声	2		ほめ方	3		教科書	2		指示	2
	言葉遣い	2		配慮の仕方 (支援を要する子)	2		本時の指導計画	2		説明	3
	話術	2		学習規律	2		めあて	3		助言	2
	ユーモア	1		学習環境	3		導入	2		発言の取り上げ方	1
	目線	2		開始と終了	2		構成・時間配分	2		板書	3
	表情	1					まとめ	3		ノート指導	2
	立ち位置 立ち姿	2					省察	2		机間指導	2
										学習形態	2
										教具	2
										ICT	2
										ワークシート	2

【中学校B教諭】2年次年度11月

観点		評価	観点		評価	観点		評価	観点		評価
教師の身体的技術	授業の心構え	4	子どもへの対抗	対応の仕方	5	教材研究・授業展開	教材研究	4	授業技術	発問	4
	声	4		ほめ方	5		教科書	4		指示	3
	言葉遣い	4		配慮の仕方 (支援を要する子)	4		本時の指導計画	5		説明	3
	話術	4		学習規律	4		めあて	5		助言	4
	ユーモア	3		学習環境	4		導入	6		発言の取り上げ方	4
	目線	4		開始と終了	5		構成・時間配分	4		板書	5
	表情	4					まとめ	4		ノート指導	4
	立ち位置 立ち姿	3					省察	4		机間指導	4
										学習形態	4
										教具	5
										ICT	4
										ワークシート	4

図8:授業評価シート比較(初年度→2年次)②

もちろん、参観した学年・クラスも違えば学習内容も違うため単純比較はできないが、授業技術の高まりは一目瞭然である。この成長ぶりには、個人差はあるものの2年次を迎えたすべての教員に共通していると言える。実際、各校で行われている校内カンファレンスでも、自分が行った授業に対して、本時のねらいに即して授業を振り返ったり、改善点を整理して明確にしたりすることが出来るようになっている。また、初任者が行った授業に対しても、的確なアドバイスを送り、「自分だったら…」と授業構成や発問、子どもの意見の取り上げか

た等、具体的な支援をすることができたりするようになってきている。

2年次教員はこの2年間の研修や授業実践を通して、多くの点で自己の成長を自覚し、その成長には大勢の指導助言者や同僚の存在、学びの継続を可能にする環境、理論と実践を融合させる教職大学院の授業などが複合的に絡んでいることを認識している。そして、自己の成長に絡む複合的な要素の一つひとつに必要性を強く感じている。このことは、学び続ける教師像の確立や同僚性の希薄化が指摘される中、励まし学び高め合う学校風土や教員としての専門性を高める研修の重要性を示唆するものである。こうしたことから、「継続的な学びにつながる初任者履修証明研修プログラム」は、「初任者研修のあり方」や「初任者・若手教員の成長を支える環境のあり方」、さらには「学校改革の方向性」を追求するうえで、その推進の意義は高く評価されるものである。また、本プログラムの成果は、その実施内容と実施方法によるところが大きく、そのことも十分評価に値するものである。

4. プログラムの課題について

1) 校内カンファレンスの充実

連携協力校6校（2年次教員のみの学校を含めれば9校）の校長は、教員一人一人が“学び続ける教師”集団へと成長するために、「学びたい、成長したいと思える環境をつくりていくこと（学校風土づくり）」と考え、各校において様々な取組を行っているはずである。

本プログラムにおける校内カンファレンスは、初任者の学びの場であると同時に、校長が目指す「学び高め合う場づくり」に大いに役立つものはずだ。

一方、今年度は新しく連携協力校に加わっていただいた学校が4校（いずれも中学校）と、本プログラムの内容に対しの理解が十分でなかった部分もゆがめない。校内カンファレンスへの参加人数や活発な協議という点では課題もが多く、初任者の学びの場に若手教員を中心にもう少しつぶやくさんの教員が参加し、学校全体に学び合える環境を広げていきたいと考えている。

2) 研修時間について

冒頭でも触れたように、本プログラムはこの2年間、以下のようなプログラムで行ってきた。

- ① 連携協力校における参観授業と校内カンファレンスでの授業の振り返り
 - ・毎週月曜日実施（初任者は月3回程度訪問、2年次教員は月1回程度訪問）
- ② 理論と実践の往還を重視した教職大学院での科目受講
 - ・月1回木曜日実施（初任者対象）
 - ・集中講義（夏季休業・冬季休業他；初任者及び2年次教員対象）

実施3年目になり、訪問指導の回数を減らしたり、大学院での講義内容や時間を見直したりと、初任者の負担を減らしながらもより充実した初任者研修ができるように努めている。今後も各学校の状況、また初任者や2年次教員の研修の様子をみながら柔軟に対応していく。

3) 新たな初任者指導・若手教員研修を目指して

本プログラムで研修を行っている初任者・2年次教員の成長は、これまで述べてきた通りであり、彼らはやがて勤務先である連携協力校で中心的な役割を果たす教員になる人材でもある。

しかし一方で、大学教員のキャパシティから現状の初任者数（毎年10名）の受け入れが限界である。本プログラムで培った初任者研修の有用性を連携協力校以外に配属された初任者にも適応できるように、今後、和歌山市教育委員会と連携・協力をしながら、新たな初任者研修の場をつくりたり、若手教員にたいする授業研修の場を設けたりと、新しい取り組みにも着手していきたい。

(プログラム GM 貴志年秀)

V 履修する講義（授業・教材研究）の紹介

V 履修する講義の紹介（「授業・教材研究」シリーズにおける示範授業・模擬授業）

和歌山大学教職大学院では、初任者教員と学部卒の院生が共に学ぶカリキュラムを設けており、初任者教員は二年間で 10 種類程度の授業を履修することとなっている。一年目の四～五月は学級づくり（「学校・学級経営」）、六月ごろから授業づくり（「授業・教材研究」）、さらに集中講義で特別活動、道徳を履修し、二年目にも集中講義で子どもの権利などに関する授業を履修する。

「授業・教材研究」は I・II・III に分かれ、PDCA サイクルといった授業論や指導案の作成について、また、発問や板書・ICT 教育指導法といった基礎的な技術についての学びから始める。やがて、深い教材研究の進め方や活動的な学習の具体的手法、そして単元計画の検討など段階的に授業理論を掘り下げ、かつ実践的指導力を深めていく構成となっている。

中でも、受講生が大きな影響を受けるのが、実践的に授業を行いそれをめぐって協議する、いわゆる模擬授業である。和歌山大学教職大学院で行う模擬授業に関しては、大きく二種類に分かれている。大学院の教員が、その分野の専門性をいかして小中学校の先生役になり、実際に受講生を児童・生徒とみなして行う「示範授業」と呼ぶものと、受講生の代表が先生役になり、他の受講生が児童・生徒役になって行う「模擬授業」の二種類である。

「示範授業」では、授業が終わると、その授業のどこが優れていたのかを初任者と院生が徹底的に検討する。ここでは、先生の立ち居振る舞いや話し方、目線、子どもへの対応、発問などももちろんだが、深い教材研究に基づいた授業構成や教具の工夫といったものまで多様な視点で考察する。

学びが深まるポイントは、受講生が児童・生徒役として授業を受けていることである。教員がどのようにして授業規律を整えていくのか、どんな場面で褒め言葉をかけ、逆にどんな場面では安易に妥協しないで児童・生徒たちを学習に向かわせるか、授業を受けながらそれらを体感できる。教具一つでも教科内容に即して様々な工夫がされていることを再発見することとなる。

さらに、「示範授業」における発問がどのようにして生まれたのか、視覚教材一つにもどんな意味があるのか、そして大学院教員が教材の開発にどれほど労力をかけたのか、協議後の講義で初任者たちは初めてその背景を知る。講義で専門性の深さにふれると、「これまでのような教材研究や授業準備では、授業がうまくいかなくて当然だ。私も、教材研究を深めしっかりと授業に取り組もう」と、翌週から初任者の授業が変わりはじめるのである。

七月からは、受講生が自分の持つ学年を想定して模擬授業を行う。45 分～50 分を使って授業を行い、その後に四～五名のグループに分かれ、「良かった所」「改善すべき所」などを時間をかけてじっくりと協議をする。発表後に大学院教員から厳しいコメントがつくことも度々である。さらに受講生は講義後にその日学んだことを感想にまとめ、提出することとなっている。感想は大学院教員が講義通信としてまとめ、およそ月 1 回のペースで受講生に配付している。通信に掲載された他の受講生の感想を読むことで、前回の学びをもう一度深め、自身の省察の機会としているのである。

次頁以降に「学校・学級経営」と「授業・教材研究」の講義通信を掲載している。受講生の感想から、学びの状況をご理解いただけたとありがたい。

（谷尻 治）

学校・学級経営Ⅰ

どうする、困りごと

第1クオーターの授業『学校・学級経営Ⅰ』が終了しました。1学期も半ばを過ぎ、子どもたちはようやく「地」を出し始め、それと共に問題が顕在化し始めている頃でしょう。4月当初思い描いていたことと少しずつズレが大きくなり、教師にも気持ちに余裕がなくなりがちです、週末が来るのが待ち遠しいという初任者も多いと思います（院生は少し余裕があるようですが、実は採用試験が迫っている人が大半で、お尻には火がついているのですが）。

通算15コマ目（宮橋先生担当）で、初任者が「現在、困っていること」を出し合う場面がありました。出された「困りごと」を取り上げて、ロールプレイで対応を考えてみるという活動もありました。演じた人は分かると思いますが、その立場になると、普段とは異なる視点に気付かされます。

時間の関係ですべてをじっくりと検討することができませんでした。困りごとを出しっぱなしで終わるのも良くないので、可能な範囲で紙面で回答したいと思います。

指導に「正解」があるわけではありません。が、「こうすれば、改善の見通しがたつ」というのはあるでしょう。学級経営・生徒指導面の「困りごと」を自分ならどうするかを考えつつ、読んでもらえたら幸いです。※「授業」に関することは、第2クオーター以後の「授業・教材研究」で改めて考えていきましょう。



困りごとを開拓するため、ロールプレイに挑戦

こんな困難をかかえています

出された「困りごと」等をもとに構成

困りごと1（中学校3年生） 生徒指導の悩みです。自由すぎる生徒がいます。規律もなかなか守れません。どのようにすれば規律を守らせられるでしょうか

ヒント：教師が必ず求められるものの一つに、「児童・生徒に規律を守らせる」というものがあります。きちんとさせられたらどんなに楽か……。この悩み、よく分かります。強く指導すれば「素直にきく」というほど単純なものではありませんしね。そもそも、その生徒はどうしてそのような行

動様式を身につけたのでしょうか？きっとそのように振る舞ってしまわなければならない生い立ちがあるはずです。考えられることは、何らかの暴力的指導を繰り返し受けたこと（強い指導にしか従わない）、そもそも多動で抑制が効かないケース（発達障害の場合と虐待による多動があります。両者は見分けが難しい）、規則的な規律ある生活を経験せず親の十分な保護がないままに勝手気ままに育ってきたケース……。と、少し考えただけでも色々考えられます。背景が違えば指導も変わってきます。一律にはいかないでしょう。焦らず、じっくりと子ども理解を深めては？

どんな声かけ（指導）をすれば比較的素直に指導を受け入れるのか、うまくいくことを探してみましょう。小さなことでいいんですよ。それを積み重ねて信頼関係を築いていく、これが王道です。

困りごと2（小学校4年生） いらないことをすぐ口にする児童がいます。言い換えされたり注意されると手が出てしまい、興奮してトラブルが白熱していきます。学級の雰囲気も悪くなっています。

ヒント：彼の孤立感（孤独）を感じられますか？ 学級の中で彼は居場所がなく、「いつも、俺ばかり責められる」と思っていませんか？ 「いや、彼に原因があるから仕方ない」というのは一旦おいておきましょう。トラブル発生時に、その経過を読み解いたことはありますか？ 学級みんなでやれたら一番いいのですが、関係者だけでも有効です。トラブルに至る流れを絵で描いたり文字で表したりして「ああ、ここで怒りがわいたのか」「どう言ってもらえた、素直に聞くことができる？」等と確認するのです。その際、彼の味方になってトラブルの読み解きをしてくれる子どもがいるといいですね。それと、子どもたちの中にすぐ先生のように注意する子がいると、彼はますます追い込まれ、トラブルのもとになります。「キミたちは注意しなくていいよ。注意するのは先生の仕事」と立場を分けることも必要です。

困りごと3（小学校3年生） 上靴を履かない子がいます。言うことを聞かないし、宿題をしてこない。ノートも書きません。どう指導すればいいのでしょうか。

ヒント：これらの困り事は「見える」部分ですね。「見えない」（隠れた）部分はありませんか？ つまり、こういう行動をとってしまう背景です。「困った子」は教師や仲間を困らせる存在ですが、実は誰よりも困っているのはその子自身です。「困った子」は「困っている子」なのです。まず、子ども観の転換から始めましょう。

宿題が少しでもできるときはどんな時？ ノートを少し書くのはどんな時？ 上靴はすぐに履くことを期待しないで、その子の長所をたくさん發揮できるように支援の視点を変えてはどうでしょうか？

状況からすると「発達障害」の可能性と養育不十分（ネグレクトまでいかないと思いますが）の可能性が考えられます。それらも丁寧に見ていく必要があります。診断を受ければ良いというのではなく、担任自身が手探りで背景を丁寧にみていく作業が大切です。当然、保護者とつながり、腹を割って話せる関係になっていくことも鍵となるでしょう。

困りごと4（小学校3年生） トラブルを起こし、繰り返し指導してもなかなか変わりません。どこから手をつければ良いのでしょうか。

ヒント：「指導が入る」というのは、かなり高度な技術だと、私は考えています。「教師が注意する→子どもが注意をきく」ができているように見ても表面的なことだけかもしれませんよ。若い頃は「自分の指導が先輩教師のようにビシッと入っていけばいいのに」と思いがちですがね。

①同じことを繰り返しているというのですから、今までの注意の仕方ではダメだということははつきりしています。注意の仕方をもっと考えて、工夫してみましょう。同じような内容でも、

子どもが注意を受け入れやすくなる言葉と反発したくなる言葉があると思います。

②「指導←→被指導」の関係が成立するというのは、時間がかかると私は思います。子ども時代を思い出してください。「この先生の言うことはホンモノだ。耳の痛いことを時に言われるが、信頼できるし、ついて行こうかな」という段階になるまでには時間がかかったでしょう？あるいは、よほどのカリスマ性があったか、ですね。指導が入るようになるには時間がかかります。そこにいたる前に、その子（その子たち）から信頼されるような何かがないと、仮に注意を聞いているようにみえてもそれは仮の姿です。「信頼される先生」になることが、時間がかかるようで、最も近道だと思います。

困りごと5（中学校） 時間の使い方で困っています。授業の空き時間は少ないし、その時間でも自分の仕事より優先しなければならない業務があります。残業規制が厳しくなり、部活指導を終えると、もう授業の準備をする時間はありません。生徒と接することができる時間も少なく、自分の無力さを感じことがあります。

ヒント：自分を責めるのはやめましょう！ あなたの問題ではなく、これは日本中の教師が直面している難題です。超過勤務を厭わないで働くという意思を感じますが、やはり、働きやすい環境を管理者には作って欲しいと切に願っています。

さて、タイムマネジメントについてですが、これは工夫の余地がありそうです。優先すべき事項と後回しにしてよいことを振り分ける、そして仕事の優先順位を決めることです。私は20代の頃に大変荒れている学校で勤務していたので、その頃は毎日遅くまで生徒指導に追われていました。臨時の家庭訪問だけでも一年間にのべ200軒くらいになりました。当然、教材研究を落ち着いてする間もなく、日曜は部活とたまたま家事を終わらせるのが精一杯。当時の授業は悲惨な状態でした。自分の無力さにうちひしがれる日々。四階の臨時職員室から「この窓から鳥のように飛んでいけたらいいな」と何度も思ったものです。しかし、そこから逃げないで直面している課題に向かい続けたおかげで、人間力も生徒指導力も間違いなく磨かれました。その経験がいき、次の学校では短時間で次々と仕事をこなせる力が身についていることに気がつきました。多忙な日々でついモチベーションも下がりがちでしょうが、「自分がやろうとしていることは間違っていない」と頑張っている自分を褒めてあげましょう。

学校でできることは限られていますから、現状では持ち帰り仕事はやむを得ませんね。持ち帰れないものがあることも承知していますが、深夜まで生徒指導に追われているのでなければ、教材づくりや教材研究は家でもいくらでもできますよ。



困りごと6 男子がよくケンカをします。すぐに手がでるんです。あとで、ゆっくりと話して聞かせるとおさまっていくのですが、繰り返します。周囲の子も困っています。

ヒント：小学校？ 低学年？ それなら、よくありますね。本来、子どもってケンカしながら成長していくものですよね。今は、ちょっとしたトラブルも幼少時から大人が介入して丸くおさめてしまいがちですが（そうしないと、保護者も納得しないですね）。

男子ということですが、男の子は言葉でうまく表現できないんですね。心の中にたまつてくると、暴発する。たまるペースは個々の育ちによってまちまちです。家庭に安定の場がないと、常に抑圧にさらされているので、ちょっとしたことで暴発します。特に、大人の暴力を間近に見ている子や親から殴られたりする機会が多い子は、当然、暴力に対するハードルが低いので、簡単に手が出ます。

当面は、小さなトラブルにつきあいつつ、長期的戦略をたてましょう。

1. 暴力を使いやすい環境があるのかどうか。そういう環境なら、どのようにして、その抑圧から子どもを解放していくか（児童相談所や民生委員さんらの協力が必要になるかも）。
2. 言語化するのが苦手な子なら、カッとなつた時に、自分の気持ちをどうコントロールするのか、相談したり練習する（アンガーマネジメント）。

アンガーマネジメントや発達障がいの子へのトレーニング法の書籍も増えてきました。昔なら、子ども集団の中で自然に身につけられた対人関係力が、今は意識的にトレーニングしないと身につかない時代になっているんですね。

困りごと7（中学校3年生） 協同（協働）学習に入れない生徒がいます。そのため、グループ活動が難しい状態です。本人に無理強いはしたくないのですが……。

ヒント：中学生であるということを前提に答えます。思春期まったくこの時期は、一筋縄ではいかないものです。わざとそういうふうに振る舞っていることもありますし、本音では自分も参加したいけれど、つい「そんなことやってられねえ」ポーズを取る子もいます。その生徒とじっくり腰を落ち着けて話をされたことはありますか？ きちんとさせることを大前提とした話でなく、どんな気持ちで学校生活を送っているのか、授業を受けているのか、ちょっとでも前向きに参加できそうなことはないのか。二人きりであくまでも「指導」としてするのではなく、「心の内を聴く」というイメージです。じっくりと話を聞いてくれる教師に敵対的な態度をとる生徒はめったにいませんから。そんなことをきっかけに、態度の変容がうまれるかもしれません。

もう一つ考えられるのは、そもそも「協同学習をする値打ちのないことをさせようとしている」可能性もなきにしもあらずです。大半の生徒はそれでもそれなりに教師の指示に従おうとしますが、何からの屈折したものをかかえている生徒は正直に「面白くない」と態度で示します。どんな活動を設定すれば、その子が意欲を示すのか。これは粘り強い試行錯誤が必要だと思います。

困りごと8（中学校） 部活で1人の部員が無気力です。彼のとる態度などが周囲の部員に影響し、このままいくと2～3人の部員が退部してしまうかもしれないと危惧しています。

ヒント：部活指導は中学・高校教師の大きな仕事となっているのが現状ですが、大学時代に指導法については何も学ばずに顧問をしている、いわば無免許運転状態です。うまく運転できなくてあたりまえでしょう。大半の顧問は自分が子ども時代に受けてきた指導を思い出して、それを応用しているにすぎません。すべての顧問がコーチング法を学ぶことが急務ですね。

まずは授業でも話したように「あの子さえいなければ……」という幻想はキッパリと捨てましょう。排除の発想が良い結果をもたらすとは思えません。部活指導は集団指導です。つまり、学級集団指導と通じるところがあります。どの生徒にとっても（課題の大きい生徒にとっても）楽しく有意義な活動になればいいですね。試行錯誤を重ねながら少しづつ適切な指導法が身につくような気がします。ただし、教科指導や学級指導と同じで、本気で取り組まないと良い指導法はみつかりません。私も初任時代から練習メニューを考えるために本を買い込んだり、うまくいかない指導に悩んだり、メンバーの選出について保護者からクレームをつけられたりと苦労を重ねました。経験を

重ねる中で、「こうすればうまくいくな！」というコツをつかみました。最も重要なのは部員との信頼関係づくりです。

コツ（指導のポイント）はもちろん何点のあるのですが、ここでは一つだけ紹介します。それは、目標設定用紙の記入です。大会1～2ヶ月前に目標を自分たちで決定させ、そのための課題を各自に文章化させるのです。これは大阪市立松虫中学校陸上部顧問であった原田隆史さんの指導法に学んで、取り入れたものです。原田氏の著作に一度、あたってください。私の場合は、この手法を取り入れてから、チームとしてのまとまりも個々の意識も変容していきました。



困りこと9（小学校3年生9） こだわりの強い子がいます。授業時間が終わっても、鉄棒をずっとトライし続けようとします。次の授業はおかまいなしにです……。

ヒント：授業が終わってもずっとやり続けようとするなんて、スゴイですね！ うまく出来ないんでしょう？（推測）うまくできなくてもチャレンジするなら、褒めたいところですね。普通はやりたくないですから……。上手にも関わらずまだやりたいというなら、それはそれで面白いです。のために「鉄棒〇〇オリンピック」とでも名付けて、みんなの前で思い切り活躍させてもいいかも！ ところで、こだわりが強くてなかなか教師の指示に従わないということが悩みのようですので、何らかの困り感を彼が抱えているという前提でちょっとヒントを差し上げます。

それは「提案・交渉型アプローチ」とよばれる発達障害の子への有効な指導法です。「鉄棒をやり続けたい。〇〇をやり続けたい」というこだわりを止めようとすればするほど、子どもはこだわりを強くしがちです。そうではなく「どうして、授業時間が終わってもやり続けたいのかな？」「もしかして、みんなのようにうまくなりたいと思っているのかな？」と共感的に子どもの思いを聞き出す→「じゃ、こんな方法はどうかな？ ①一人でやり続けることは危険なので他の先生に見守ってもらう ②次の授業もあるので10分間だけは延長する どっちがいい？ もっと良い方法はあるかな？」など、代替案を出して交渉しつつ、その子にとって良き方法をさがすというものです。詳しくは『発達障害の子どもの「できる」を増やす 提案・交渉型アプローチ』（武田鉄郎著、学研）を読んでみてください。この本、オススメです！

初任者の困りごとを聞いて ー院生も考えましたー

課題 初任者の困っていることを聞いて、学校現場に立った後にどのような困難さに直面すると考えますか？ また、そのためにどういった準備や事前の学習が必要だと考えますか。

Aさん 学校現場に立ったときにしかわからない、予想外の困難さに直面しても冷静に対応できるよう、これから実習などでの経験を一つひとつ大切にしたいです。また、生徒に対する困難さだけでなく、保護者や上司などに対する悩みも出ると思います。したがって、様々な事例や実践にふれられる講義や書籍になるべく多く接したいと思います。

Bさん 時間の使い方や保護者への対応、生徒指導など、これといった正解のない問題に直面すると思いました。様々なケースやその対応について教師になる前に学習していく必要があると考えました。

Cさん

- 困難
- ・問題や課題が多い生徒への対応
 - ・学力が低い生徒がわかる授業の展開
- 準備
- ・現場での経験がある先生のもとで学ぶ
 - ・実習を通して、「自分ならこうする」「こういう場合は」を念頭に置いて意見を共有、発展させられる環境で学び続ける。



Dさん トラブルメーカーや支援の必要な生徒、保護者との対応……、あげるとキリがないくらい多いです。谷尻先生のロールプレイを見て、見ている私も諭されているような気持ちになりました。現時点では経験を積むことはできないけれど、知ることはできます。もしこうなったら…、こういう時は…というケースをたくさん考えておけば、いざそのときに何もできない事態には陥らないと思うので、できるだけたくさんの事例を考察することが必要だと考えました。

Eさん 授業や部活など、多くの場面で困難にあたることがあると思います。その中の指導方法などの知識もあらかじめ知っておく必要があると思いました。また、他の人の指導方法なども見ることで、より考え方なども深まると感じました。

Fさん 生徒の対応のために時間を費やすことで、教材研究やその他の業務をする時間がなくなり、授業づくりに影響ができる可能性がある。そのため、なるべく長期的な計画のものは早い内に取り組んでおき、1日の中に余裕を設けるようにするべきだと考える。

Gさん 時間管理がきちんと出来ていないとダメだなど。時間の問題をどう解決するか、優先順位はどこにあるのかを考えてやっていきたいです。

Hさん 言うことを聞かない、説得することができないといった、生徒との関わりの困難さに直面すると考えられます。事例研究などから学習しておくことが必要だと思います。実際に学校現場を経験された先生が直面した困難なことを聞き、どのように対応したのかといったことを学んでおくことも必要だと思います。

クオーターⅠを振り返る 初任者の振り返りより

Iさん 経営していくためにはまず全体を通してのしっかりとした計画が重要であることを学んだ。その上で、生徒にもしっかりと伝えていくための学級開きや、一貫性といったものが学級や学校を形成していくと実感した。また、経営していくための手段として、アイスブレイクや学級通信（教科通信）、文集、心の地図や学級地図などにもチャレンジしていきたいと思う。

Jさん 具体的な解決策や経験談をたくさん聞くことができ、とても参考になりました。学級新聞や学級懇談会、心の地図など、この授業を受けなければ実施していなかったり、工夫がたりなかつただろうと思います。学校行事に合わせ、タイムリーに授業をしてくださったのも、有難かったです。

す。

Kさん 問題のある生徒の話をまずよく聞いてあげることが大事で、その話の内容にはいつも過去のトラウマなどがあり、そのトラウマを少しでも軽くしてあげないと、「今」をいくら指導しても、変わっていかないのだということがよく分かりました。

Lさん 家庭訪問や校外学習、学級通信など、「学校・学級経営Ⅰ」で学んだことをすぐに活用できる機会があったので、実践にうつすことができた。他の先生方の意見を聞けることも多く、「こんなときはこんな対応をするんだな」と納得できた。学んだことを忘れず、2年目・3年目にも活かしていきたい。

Mさん たくさん教えていただいたものの、すぐに実践できるものばかりかというとまだ難しく感じるものもありました。特に、子どもを理解して適切な指導をするということは、私の教師人生の長く大きな課題になりそうです。でも大事なのは常にアンテナを高くしておくということです。日々の忙しさのあまり見過ごしてしまうことはたくさんあります。その一瞬は二度とおとづれないわけですから、より一層一つひとつに全力を傾けていきたいです。

Nさん 実際の問題について、学級経営に活用できたり、他の学校の現状を知ることができた。アイスブレイクの内容を学級で使ったりできた。また、ロールプレイすることで、相手の気持ちになって考えてみたり、討論することえ新しい発見があった。

Oさん 気になる子供に対して、どういう支援がよいのか、具体的な事例を出して聞くことが学校ではあまり出来なかったので、多くのことを学べて本当に勉強になった。今回、心の地図を書いたとき、その子供の心を分かった気持ちでいたが、「もっと知りたい」「もっと関わろう」という気持ちになった。他の気になる児童に対しても、心の地図を書いてみたい。」

Pさん クラスの中で一番気になる子の対応を後回しにしない。→しっかりと看取っていきたい。クラスの集団を看取る（心の地図、学級地図）活動で、しっかりとクラスをみることで、普段落ち着いている子のかかえているしんどさもみることができました。

Qさん

- ・ロールプレイを見て、子どもの気持ちが少しあわかった。
- ・初任者の人、みんな困っていることがあるとわかり、ホッとすることができた。
- ・マイナスの言葉よりプラスの言葉を使いていきたい。

みなさん、blogは見ておられますか？

和歌山大学教職大学院のblogを見ておられますか？ 2～3日に1度は更新されていて、大学院の授業やこの初任研プログラムの様子などが、細かく紹介されています。 <http://w-pde.jpn.org/wp/>

初任者の授業を参観し、学ぶ院生たち

・ 2018/6/7 ・ T コース, 初任者研修, 活動報告

授業実践力向上コースの 1 年生は、毎週月曜日に実習校へインターンシップへ行きます。



2018 年度入学の彼らは、全員が中学校志望なので、普段はそれぞれの中学校へインターンシップに行きますが今回、実習先の 2 つの中学校がちょうど中間テスト中だったので初任者研修プログラムを受講している初任者がいる小学校に実習生も入らせてもらいました。

1人目の初任者の授業を参観

2人目の初任者の授業も参観



管理職の先生方も見に来てくださっています。



放課後に実施したカンファレンスには、初任者と参観した院生だけでなく、2 年目、3 年目の若手教員も参加してくれました。

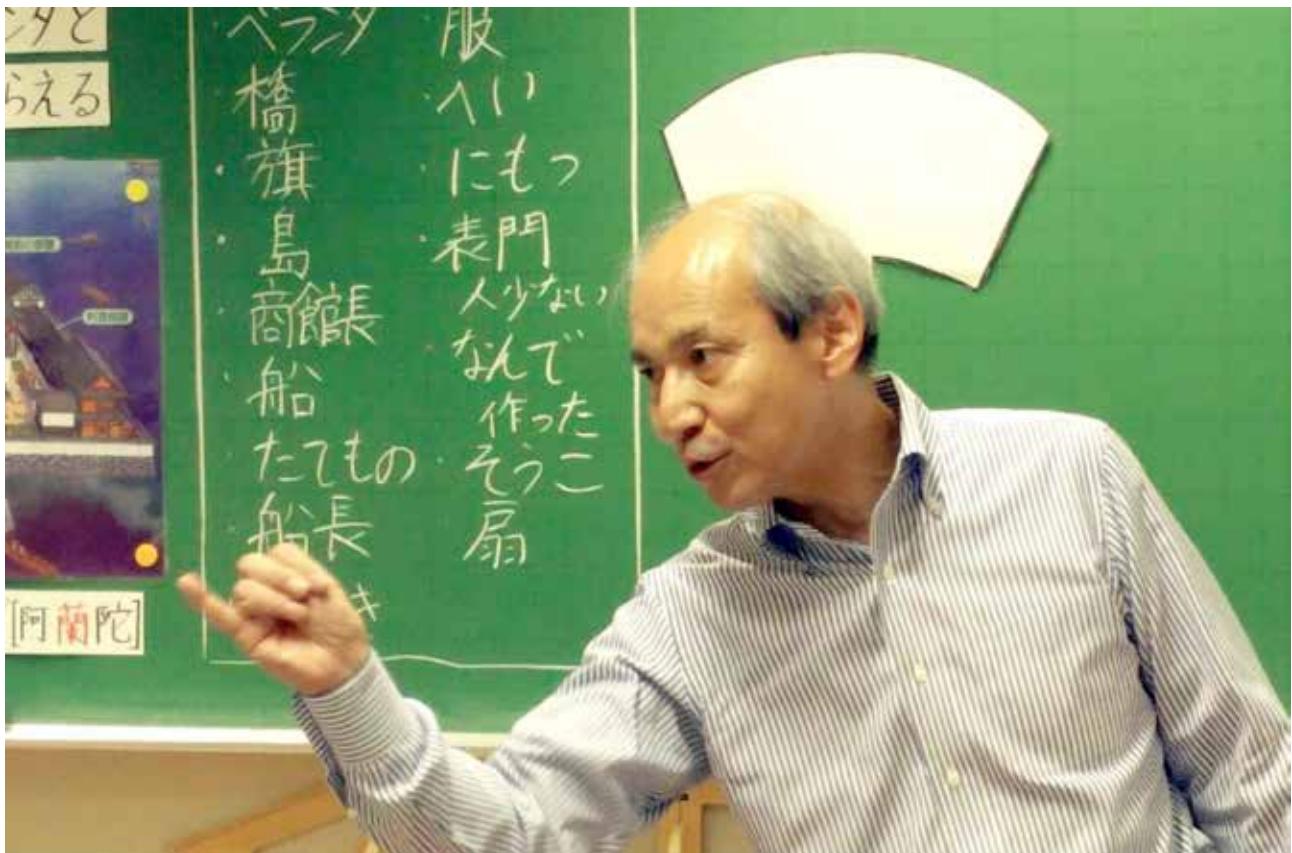
中学校志望の院生たちにとっても、小学生がどのように授業を受けているのか、あるいは、小学校教諭の丁寧で細やかな子どもの看取り、順序立てた指示の出し方、机間指導による個への対応など非常に勉強になった 1 日だったと思います。自分たちの授業づくりに生かしてほしいですね。

目の前の子どもたちから学びましょう

ところで、みなさんは子どもから学ぶことってありますか？ 教師は実際にたくさんのことと子どもから学びます。教師がちょっとくらい指導力を身につけたところで、時代が変わり子どもの質が変わるとたちまち以前の指導法ではうまくいかなくなるものです。若い頃は「先輩教師のようになりたいな。みんな指導力を身につけて、子どもたちを思うとおりに動かしてみたいな」などと思ったりしました。しかし、それなりに指導力のある人でも、目の前の子どもから学ぼうという姿勢を失うと、たちまち子どもと波長がずれていきます。そして、それを親や社会・時代のせいにしていると決定的なズレをおこして、やがて指導が成立しなくなる……。そんな教師になりたくないですね。

今は無我夢中で学んでいるみなさんですが、10年後・20年後も今以上に熱意をもって学習と実践を重ね続けているか……。最初の分かれ目は、3年後にやってきます。

授業・教材研究Ⅱ



誰が子どもに火をつけるのか

10月5日の授業

時 限	内 容	担 当
1～2	単元について、単元をつらぬく言語活動	中山
3～4	模擬授業「私たちの町のスーパーマーケット」とその検討	豊田・(繁)
5	示範授業「出島」とその検討	須佐・深澤

第3クオーターの授業・教材研究Ⅱがスタートしました。この日はまず「単元」について基礎・基本から学び直しました。中山先生が、映像や実物教材（黒板掲示物）を使って、わかりやすくかつ具体的に講義されたので、「単元計画を立てること」「単元と貫く言語活動」の重要性がよく理解できたことでしょう。

続いては、繁さんの模擬授業「私たちの町のスーパーマーケット」。なんと言っても繁さんの子ども（役）への対応力が見事でしたね。笑顔が教師にとっていかに大切かも改めて感じさせてくれる授業でした。豊田先生の研究から生み出された単元デザインシートや思考ツール（カード）を使っての分析もいつもとは異なる視点で授業をとらえることができました。

そして、深澤先生による示範授業「出島」。社会科で、ここまで深く教材研究を重ね一時間に凝縮された授業を観ることは、生涯を通してそうはないでしょう……。この瞬間に立ち会えた幸福を忘れないで欲しいです。その奥深さをみなさんの感想からもう一度味わってください。

午前中は単元について考えることができました。普段は次の日の授業を準備していくことで精一杯で単元を見通しての計画はなかなかできていませんが、自分の間違いに気づくことができました。ただの一時間の授業ではなく目指す生徒像に焦点を当てて普段から授業づくりをしなければならない。授業の奥深さや計画していくことの重要性に気づきました。

繁先生の模擬授業で、イオンに行って気づいたことを発表させ、それをまとめていくという授業の進め方でした。たくさん出た意見の中からどうやってまとめていくのかなと考えながら受講していました。自分はまとめることが苦手なので、繁先生の、他に意見を出させたり、生徒の意見からカテゴリーにまとめたりするテクニックはとても参考になりました。

深澤先生の授業は、興味を引くものが多くあり気づいたら普通に授業を受けていました。社会科の教員として学ばなければならない、吸収したいと思うことが盛りだくさんでした。気づいたことを発表させることは授業を広げるテクニック。簡単なようですが、広げていくには教材研究が重要であると感じさせられました。自分の課題である板書、ICTの活用法などお手本にすることばかりで、自分自身がまた少し成長できそうだなと感じられた示範授業でした。ありがとうございました。

後雄太（楠見中）

午前の内容では小学校国語における「単元を貫く言語活動」についてビデオ等を見ることで、単元を通した授業づくりは子どもにとっても学びの見通しがあり、自分自身で思考できる授業になることを知ることができました。また、子どもの「面白い」から始まり、教材文以外の本につながる点がとても魅力的でした。国語科以外の教科でも単元を意識すれば魅力的な授業ができると思うので、単元を意識した授業づくりをしていきたいと思いました。

午後の繁先生の模擬授業は児童役をしていてとても楽しい授業でした。そう感じた要因は児童の意見から展開されていくことと、「なんて書いたらいい？」と問うなど工夫して児童の言葉で板書ができていくように、本当に児童中心の授業だったからだと思います。また、用意していたものでも展開に合わせて使わないなど柔軟な対応もされていました。見習うべき点がたくさんあり、とても勉強させてもらいました。

深澤先生の示範授業では授業規律や発表方法などの工夫があり、実際の授業で試していきたいことばかりでした。実物教材や深い教材理解も見習うべき点で、深澤先生のようになるには時間がかかると思うのですが、院生の間からコツコツ頑張っていきたいと思います。

藤並周平（院生）

◎単元計画について

年間指導計画は、4月当初、どうすればいいのかもわからず、相談の先生に教えてもらいながら、マイカリキュラムを作成した。今回単元計画を立てるに当たって、実際の子どもたちを考えながら計画を立てられたのは、4月当初に比べると、少しではあるが子どもの目線が出来てきたのかなと嬉しかった。実際、単元計画をたてると、本時が次時のどこにつながっているのか明確に授業ができるので、進めやすいことは実感している。これからも、頑張っていきたい。

◎模擬授業について

社会科の授業において、子どもたちの意見をどうまとめていくのは、本当に難しいと感じた。意見を自由にしていく形にするとどうしても、バラバラの流れになるので、とても板書が難しい。自分で、どんな意見が出るのかノートで確認したり、予想したりしながら、あらかじめ項目を考えて板書をしていくことも大切なのではないかと考えた。

◎示範授業について

深澤先生の教材研究の深さが、授業に全て現れていると感じた。実際の授業のなかで、あれほど教材研究をするとなると、本当に時間がかかるって、大変だろうというのが、本音である。しかし、用意した分やっぱり子どもたちの反応もよくなるし、教師の心の余裕も生まれることは、実感している。時間と、効率と、子どものためなどの間で悩むことが多いが、深澤先生の授業を見させていただき、やっぱり教材研究は大切であると改めて考えさせられた。

西川史織（有功東小）

普段その日その日の授業計画の構想で終わってしまうことが多く、年間→単元→本時へとの流れに意識していかなければと思います。単元を見通した授業づくりでは、どの言語活動を取り入れるかを単元計画から練っておかなければ、本時で生徒に付けさせたい力を教師自身が見失ってしまうと改めて感じました。また、単元構想をするだけでも今の私にとって時間がかかっているので、日頃から本時だけにとらわれずに、「見通し」をもって授業計画をしていきたいです。

繁先生による模擬授業では、単元及び本時の授業構想の大切さがよくわかりました。事前に何を学ばせておく必要があるか、本時で何を習得させたいのか、次時へどういうふうに繋げていけばいいのかなど、実践をみながら考えることができました。また、計画していたことも授業の流れでは、臨機応変に対応していくところも参考にしたいと思います。

深澤先生の示範授業は、まず視覚教材が多く、生徒が主体的に活動しやすい構成・内容でした。グループ活動では、拡大図を使って自然と言語活動が活発化する工夫があったり、発表の機会も必ずあったり、深澤生徒がおっしゃられたように主体的・対話的な活動を体感できました。一番印象に残っていることは、「今回の授業は疑問を持たせる授業」というところです。次時へつなげたり、家庭学習など意欲的な態度を育てるところも授業構想の段階でしっかりと計画する必要があると思いました。

古井貴也（西浜中）

今回は、単元を見通して、児童に目標をしっかりと持たせて、授業をしていけば良いのだと、改めて感じた。『木を見て森を見ず』という言葉が印象的だった。その後の『三年とうげ』の授業を実際に見せてもらい、規律がしっかりとした中で、落ち着いて、自分の考えや気持ちを話し合えていた姿を見る事ができた。そういった真の授業をなかなかできずにいるので、もう一度、気持ちを引き締めていきたい。

社会科の示範授業では、緊張感の中にも、一人ひとりが考える時間が何度もあり、メリハリを感じた。常に、指さしを指示したり、ペアで確認したり、どの子も見落としがないようにの配慮があった。『えっ・』と思うような興味付けがあり、その『えっ・』と思った疑問をきっちりと話して貰い、わかりやすかった。私は、学習の間をうまく繋げていけてないので、その間を児童に、いかに退屈させずに、気持ちを持続させるかが、課題だなと改めて感じた。

やはり、教材研究が大切であると感じたので、どの授業でも、今までより一つでも、児童がなるほどと思えるものをみつけていきたい。

石川なおみ（藤戸台小）

今回の講義では単元計画を中心に、自分の授業を考え、繁先生の模擬授業・深澤先生の示範授業を受け、今後どのように授業を組み立て、年間指導計画をどう立てていくかの構想を立てることができたと思います。指導計画を立てる上で、年間指導計画から単元計画を立て本時の授業計画につなげていくことが重要だと学ぶことができました。繁先生の模擬授業では、子どもとの関わり方や写真の提示の仕方、意見の取り上げ方が参考になりました。

深澤先生の示範授業では、些細なことでも褒めること、各班ごとに拡大した教科書の資料の配布、授業規律や発表のルール、子どもがワクワクして受けることができる工夫・展開が非常に参考にな

りました。板書だけでなく、ICT を用いることで、生徒の興味づけの幅を広げることができ、学びを深める 1 つの手立てとしても活用できると感じました。これからも模擬授業や実習での授業、教師となった際の授業全てで生かしていけるように、学びを深めて実践していきたいと考えました。

中谷彰悟（院生）

本日の初任者研修では、単元の指導計画を立ててみて、自分を始め T1 の生徒はあまり書けていなく、現場の先生の凄さ、また自分たちもいずれしっかりとたてることができるようにならないといけないという点を感じました。実習では単元を持たせていただくと思うので、その点も意識して今後の授業に取り組みたいと思います。

繁先生の模擬授業ではたくさん学ぶ点がありました。繁先生の生徒を包み込むような暖かさは、授業の雰囲気を良くして、全員が参加したくなるような感じがありました。自分も生徒に対する接し方というのを今一度考えてみたいと思いました。

深澤先生の授業では、教材研究の深さ、また全員で 1 つの授業を作り上げるという、まさにプロフェッショナルを感じました。実物を出すことによって生徒が与えられる影響というのも受けさせていただいたことによって分かりました。社会科なので特に本日の授業では学ぶことが多かったです。

河野翔太郎（院生）

単元を貫いた指導計画について、特に自分たち院生は実習校の先生方の単元計画を踏まえた上で授業計画を立てる必要があると感じた。しかし、自分が現場に出た場合は自分自身で計画を立てていかなければならないということを知ったため、今のうちにしっかりととした単元計画を立てる練習をしておく必要があると思った。今のうちに周りの先生方の事例を参考に、教材をマクロの視点から見る力を持つておきたい。

繁先生の模擬授業では、児童の意見を中心まとめる授業の大変さや、板書計画の難しさを感じることができた。また、豊田先生の解説から情報収集や成果物作成までの手段には多様な方法があると知り、すぐに理科の授業案にも取り入れたいと感じた。

深澤先生の師範授業では、教材研究の深さが授業にどう生きるか、一つの教材が持つポテンシャルの高さを改めて知ることができた。自分の専門とする分野でも用いる教材を実際に見たり触ったり現地に行ったりして教師自身が学んでおくことで児童の学びに返すことができるのだと感じた。



丸山和輝（院生）

年間授業計画や単元計画を考えるにあたって、今までの自分が本時 1 時間にしか目を向けられていなかつたことに気がつきました。どのような生徒を育てたいのか、しっかりと目的を持ってこれか

らは授業研究をしていきます。

繁先生の授業では、教材の工夫、授業の雰囲気など、たくさん素晴らしいところがありました。何よりも子どもへの対応の仕方を見習いたいと思いました。私の授業では子どもの意見を拾わずに無理やり進めてしまうところがあります。一人ひとりの発言を大切にしつつ、なおかつ授業を脱線させずに重要な発言を拾う授業を意識したいと思います。

深澤先生の師範授業では、院生としてメモをとろうとしていたのに、つい夢中になって授業を受けてしまいました。授業への惜しみない準備と専門性の高さが伺えました。特に、授業規律や締めるところはしっかりと、笑うところはにっこり、といったメリハリ技術を参考にしていきたいです。

金曜日に自分も模擬授業を行ったことで、授業を作る大変さを改めて痛感しました。繁先生、深澤先生の授業から多くのことを学べました。学んだことを次 自分に生かしていけたらと思います。

谷口千晴（院生）

繁先生の模擬授業、深澤先生の示範授業では、ともに小学生を対象にしたものだったのでわたしにとってすごく学びが多くありました。2学期ももう1ヶ月が経ち、子どもたちが少しずつ気が緩んで来ているように感じます。それに伴ってわたしの授業もどんどん改善をしていかなくてはいけないのですが、今すごく悩んでいます。1学期と同じように取り組んでいるつもりなのですが、なかなか子どもたちが乗ってきてくれないように感じていて、それを補うようにわたしがたくさん喋るようになってきてしまっているのです。なんとかこの状況を開拓する手がかりが欲しいと思っていたところに今日の2つの授業はすごく効果的でした。

やはり大きな課題は「視覚にうつたえかける」ことができていないことにあります。言葉を尽くしてもなかなか子どもたちには伝わらないんだということを、今日の授業を受けて痛感しました。繁先生が用意されていた写真、深澤先生のICTを使った視覚教材どちらも、わたしのような大人でもなるほどなあと思わされました。単元を見通してここでなら使えそうというところで効果的に視覚教材を作る、使うことに挑戦したいと考えました。

室宗介（日進中）

午前中は中山先生による単元設定を作り方についてご指導をいただきました。年間計画に基づき、単元で何を生徒に身につけさせるのかを考えて単元計画を作ることを学びました。初任者の先生方はきちんとかけている先生方がいらっしゃったので、見習いたいなと思いました。それと一緒に、指導書をきちんと読めるようになりたいと思いました。

午後は繁先生の模擬授業でした。三年生の社会科の授業で、イオンの人気の秘密について学習することを想定していました。スーパーの写真がたくさん用意されており教具を惜しみなく使う、又は使わないといったやり方は非常に参考になりました。次には深澤先生の模擬授業でした。教材研究がとても深く、見事だとしか言えない授業でした。一つ一つの教材・教具に意味がありとても参考になりました。授業規律の付け方も参考になる点も多くありました。持ってきたお菓子はレプリカと食品への配慮があり、とても参考になりました。

瀧本康宏（院生）

今回の初任者研修では、和歌山大学教職大学院ならではの密度の濃い、充実した1日を過ごすことができました。中山先生の授業では、今回も教員として身につけておくべき知識や、常に持つておかなければならない意識について学ぶことができました。加えて、深澤先生の示範授業では、教材研究の深さや教師としての所作はもちろんのこと、本時の内容以外やその科目以外の学習内容も活用するなど、中山先生の講義で学んだことの実践としても多くの驚きと学びを得ることができました。繁先生の模擬授業では、初任者と思えない落ち着きと準備力、オリジナリティをうまく組み込んだ授業構成は、児童の関心を寄せ集中を引きつける技術だと思いました。

今日一日で学んだことや気づいたことは、今月の模擬授業や来月の小規模校実習での自らの実践によって余すことなく生かして行きたいと思います。深澤先生や繁先生のように、児童・生徒を引き込む、主体的な授業を目指し努力していきます。

鈴木拓海（院生）

先日の講義、繁先生の模擬授業、深澤先生の示範授業が特に印象に残りました。繁先生の模擬授業では、私と同じ三年生でスーパーマーケットの授業でした。児童が調べてきたものを発表する内容やそれに対する反応に対応できるようたくさんの写真やチャートなど具体物を用意されていました。私はヤンチャ？な生徒役として「見切り品とかあるで。」とペアで話をしていると、「そんなんあるん？！発表してくれる？」と促してくれ、決して批判的な発言はありませんでした。私自身、安心感を持って発表しようと思わされたし、繁先生自身も様々な意見に対応できるよう教材研究されていたんだなと感じました。

深澤先生の示範授業では、五年生社会で出島について様々な視点から展開されていました。授業内容もさることながら児童との関わり方、規律の仕方が特に参考になりました。児童の発表の方法を次の日早速実践してみました。師範授業の様にはいきませんでしたが、効率的な方法を教えてもらえたなと思いました。

林宏行（有功東小）



中山先生の授業から、単元を見通した授業が大切であると改めて感じました。単元を通して、授業を行うことで子どもたちも全員が一つの方向に向かって、めあてをもって授業に参加できると思います。

模擬授業をして、反省点ばかりでしたが、やはり四月からの課題である板書がうまくいかないと感じました。計画を持っていても子供の反応で変わってくる板書を、もっと応用力と対応力を持って取り組みたいと思います。

深澤先生の授業では、教材研究の深さに驚きました。教科書の抑える

ところだけでなく、子供の関心を引く情報も多く、自分自身すごく惹きつけられました。教材研究はどれだけやってもやりすぎることは無いと思います。これから自分のために生かしていきたいと思います。

繁侑里（藤戸台小）

今回の授業では、単元を見通した授業の構成について学びました。これは、私自身に課していた課題でもありました。しかし、どのようにすれば単元を見通したといえるのか、指導書をどのように扱えばいいのか、自分で迷っていました。今回は、自分の教科で授業を構成する時間をいただき、先生方にアドバイスをいただいたので、日頃の自分の授業を見つめなおす機会となりました。

また、深澤先生の授業では、社会科教員として学ぶことがたくさんありました。具体物の提示で、生徒の興味関心をひく授業は何度かしたことがあります、提示の仕方や豊富な種類を見て、自分の授業はただ提示ただけだと反省しました。特に、浮世絵の提示の仕方は大変おもしろかったです。具体物を用いると、授業がより深いものになると感じたので、これからたくさん集めていきた

いと思います。

小森優歩（西浜中）

中山先生の授業から、やはり単元で計画を立てることが大切であると改めて感じました。単元を通して、授業を行うことで子どもたちも見通しをもって授業に参加できると思います。

繁先生の授業では、小学校の先生は子どもの発言の取り上げ方が中学校の先生よりはるかに上手いと痛感しました。自分も中学校現場で、あれぐらい子どもの発言を取り上げなければいけないと考えさせられました。

深澤先生の授業では、教材研究が深すぎると感じました。自分も本やテレビなど様々なところから授業に取り入れることを見つけていかなければいけないと思います。 芝拓実（院生）

「単元とは何か」を学ぶ中で、教科書の一部分だけを見て授業作りをするのと、単元を見通して授業作りをするのとでは、目標やゴールが大きく変わってくることがよく分かりました。実際に単元構想をしてみて、それを実感しました。1時間、1時間を考える前に、大きく単元をとらえ、単元構想を経て、授業作りをしていこうと思いました。同時に、それが全然できていなかったことも反省しました。今後の授業作りを大きく変えていける気がしたので、今回の学びを生かしていきたいです。

繁先生の模擬授業は、とても楽しく受けることができました。発表したことに対してとても柔らかく反応してくれるのが、大人の私でも嬉しかったし、授業の雰囲気がとてもいいなと思いました。単元デザインシートを使った協議では、みんなの考えをカードで見ることができ、同じ単元でもこんなに違う授業デザインができるんだな、と感じました。カードを使って授業作りをしてみたいです。

深澤先生の師範授業は、一枚の絵からどんどん内容が広がって深まっていく様子が圧巻でした。生徒ひとりひとりの活躍の場を確保しながら、他教科と関連させて、知識がある子も退屈しない授業をされていたのがとても参考になりました。疑問がいっぱいてきて、知的好奇心を掻き立てるようなところもおもしろく、生徒になった気分で授業を受けさせていただきました。また、ここまで授業をするには、やはり深い深い教材研究が必要だと思いました。

次回の教材研究の講義をとても楽しみにしています。ありがとうございました。

畠中ちえな（紀之川中）



◎単元構想

育って欲しい生徒像を考え、めあてを考え、授業づくりをしていくことは、とても難しかったです。大学でも学んだことはなかったし、特に高校で長い間勤めていたので、そういうことをじっくり考えたことはなかった（社会に出て行く上で知って欲しい、学んで欲しいという願いや思いはあって授業はしてましたが・・・）ので、とても勉強になりました。

◎繁先生の授業について

とても楽しい授業でした。ついつい、発表したくなって、もっと時間が欲しかったです。写真もたくさん用意されていて、生徒の発言を予想して準備することは、とても難しいと思うし、形がない授業をすることは、とても不安だと思うのですが見事に成功させていたと思います。

◎深澤先生の示範授業

歴史で、鎖国部分の内容でした。しかし、地理分野もからめて授業されていたので、とても濃い授業でした。特に、出島の写真から色々考えることは自分自身も初めてで、深く知り考えることができたので勉強になりました。テンポのよい部分とじっくり考える部分、授業規律など、徹底した部分や、グループ活動に適した写真の大きさなど、あらゆる部分にテクニックや配慮があり参考にさせていただきたいことがたくさんありました。もぐもぐタイムでの、カステラとこんぺいとうは、とてもおいしく、授業で勉強した具体的なモノなので、子どもたちにとって、忘れることができない授業になると思います。食べ物でなくても、具体的なモノを生徒にみせることは、とても重要で、自分も色々集めています。これからも実践していこうと改めて思いました。

栗林拓也（日進中）



南蛮人が伝えた頃の味を再現したカステラ

※さっそく買い求めた人がいたなら、達人への道を歩み出しているといえるでしょう。



VI 報告会資料（抜粋）

※3月9日の「教師力高度化フォーラム」にて発表予定のスライドイメージを掲載します。当日提示されたものとは異なる場合がありますが、ご了承ください。

2019.03.09

初任者研修履修証明プログラム

初任研1年目の日々

和歌山市立有功東小学校
林 宏行

1

1. はじめに

・有功東小学校の概要

- ・男子141人、女子132人、計273人の児童が通う小規模に近い中規模校。
- ・総合的な学習の時間を研究する和歌山市の研究推進校。
- ・紀の川と千手川に囲まれた地域、地域住民の体育館使用、独居老人のお食事会。
- ・研究主題は、「子どもが自らの世界を拓く学習～探し続け、新しい自分にあう生活科・総合的な学習の時間をめざして～」

・3年光組のようす

- ・男子14人、女子10人（虹組男子1人、女子1人）
- ・男女ともに外でドッジボールをしたり、鬼ごっこをしたり活発である。
- ・1学期はケンカなどのトラブルがあった。2学期～校長、先輩教諭寺の支えもあり、ケンカなどのトラブルも減。学習についても落ち着きがみられるように。
- ・数名、宿題以外で学習成果や調査したノートを担任に見せに来るよう。
- ・興味・関心のあることにはやる気が特にある。

2

2. 研究課題について

「子どもの興味関心を生かし、主体的に学べる授業づくり」

- ・**課題設定の理由**
⇒意欲的に取り組める授業
⇒理解を深め、さらに新しい課題へ・・・
- ・**研究目的&内容**
(目的) 自ら考え、発表、解決を!
(内容) 生活の中で興味があることを課題とし、引き出す手立てを工夫し、示す。

3

3. 具体的な取組

① 興味・関心を高めるために



算数（重さ）の授業
実際の“重さ”的な体験活動



理科（電気）の授業
子どもの思いに沿った場の設定

4

3. 具体的な取組

② 板書の工夫

10月の板書

- ・理解を助ける挿絵
- ・チョークの色分け
- ・ホワイトボードの活用

4月の板書

- ・内容明確でない
- ・読み取り中心

5

3. 具体的な取組

③ 導入の工夫



社会（昔のくらし）

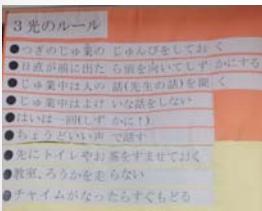


理科（電気で明かりをつけよう）

6

3. 具体的な取組

④ 学習規律を整えるために



学級のルールを掲示

- ・可視化
- ・自分たちで決める

目標達成シート

- ・全員の1日の目標になる
- ・めあてを持って取り組む



4. カンファレンスで学んだこと

・板書の方法

→書き順、配置や大きさ

・発問の方法

→タイミング、内容

・机間指導の方法

→指導ですること、みること

・教材研究の方法

→学習内容へつなげるヒント

・指導案の書き方

→必要項目、あったらためになる項目、文言



7

8

5. 集合研修で学んだこと

・教材研究の方法

→教材の視点、考え方

・授業展開の方法

→実践できる、知らなかった授業スタイル

・生活指導・学級経営

→教授や各先生の経験談

・他校種の先生と

コミュニケーション

→小中および教科の考え方

各学校の様子



9

6. 成果と課題

・成長したこと

- ①板書
- ②授業の進め方
- ③子どもの見取り

・課題として

①子どもの理解を意識した授業づくり

②授業の構成、目標や評価をしっかりと意識した計画

・2年目にに向けて

①初任の先生のお手本となれるように

②子どもの実態に合わせた授業づくり

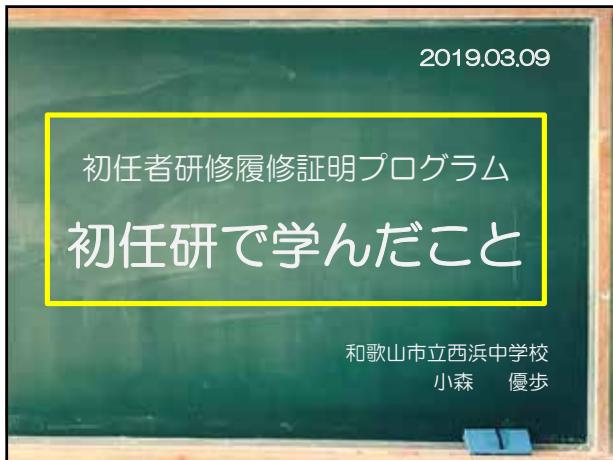
10

おわり

ご静聴ありがとうございました



11



1

1. はじめに

男子228名 女子228名 計456名

◎2年1組◎
男子16名 女子14名 計30名
【授業のようす】
・落ち着いて授業を受けることができている
・語句で答えることはできるが、説明をすることに抵抗がある
・発言、発表は一部の生徒に偏っている

2

2. 研究課題について

ICT機器を効果的に活用した学び合いの授業について

【課題設定の理由】
① ICT機器を活用して、物事を多面的・多角的に考察する力をついたいため
②グループワーク等を通じて、自分の考えを言葉にして伝える力をついたいため

【研究目的&内容】
どのようにICT機器を活用すれば、より深い学びができるかを明らかにする。

1学期：教員がICT機器を活用した授業（自作スライドの提示）
2学期：動画やストリートビューの提示
3学期：生徒がICT機器を活用した授業

3

3. 教科指導の具体的な取組

① ICT機器の活用

【教員による活用】
・導入
・資料の提示
・まとめ

【生徒による活用】
・資料の読み取り
・発表

4

3. 教科指導の具体的な取組

② グループワークを通した考え方書く時間の確保

・基本は4人班（3人班も）
・自分の考えを書いて、交流

5

3. 教科指導の具体的な取組

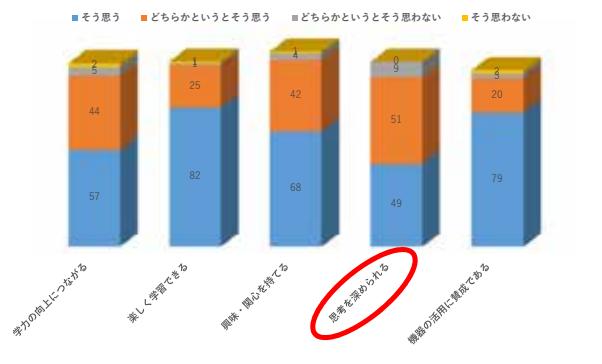
③ ノート指導の徹底

【ノート指導の徹底】

・めあて
・まとめ
・ふりかえりを1つのページに書く
・ペンを2種類以上使う
・図を書いたらメモをとる
・自分の考えを消さない

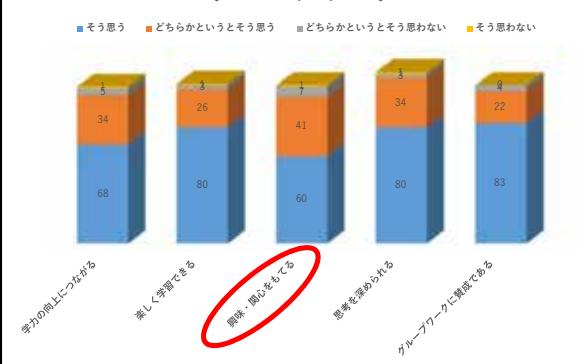
6

4. アンケート結果(2学期) ICTの活用



7

4. アンケート結果(2学期) グループワーク



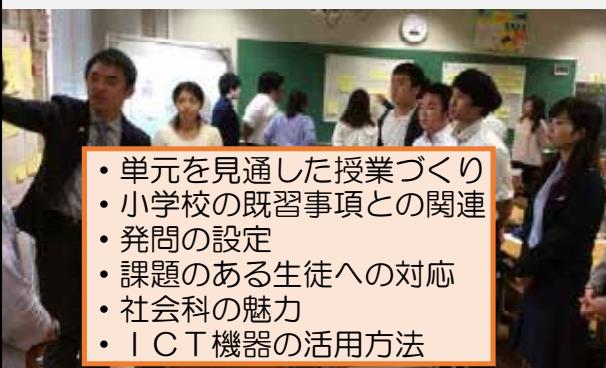
8

5. カンファレンスで学んだこと



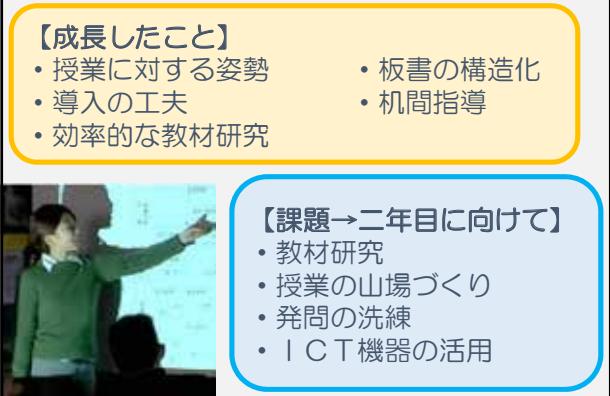
9

6. 集合研修で学んだこと

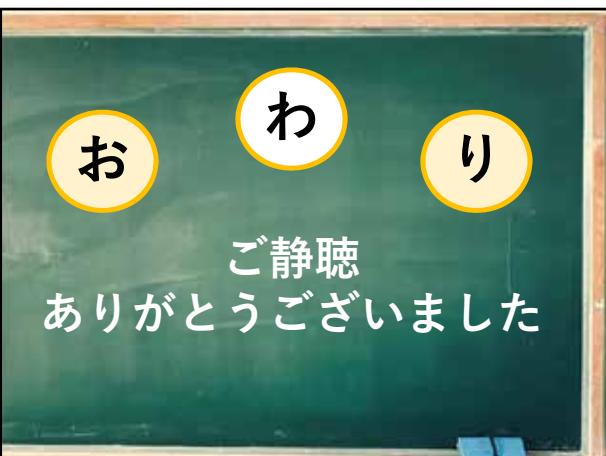


10

7. 成果と課題



11



12

第2回 教師力高度化フォーラム

継続的な学びにつながる初任者研修履修証明プログラム
成果と課題

継続的な学びにつながる初任者研修履修証明プログラ
(=初任研プログラム)

和歌山市教育委員会 (H28) 連携 (H29) 和歌山大学教職大学院

1期生 2期生 2期生

初任者の授業実践力の向上について学校現場から一定の評価

一方で・・・

負担感の軽減

という課題も

そこで・・・

今年度 は、

- 大学講義 → ☆大学訪問回数の削減
- 訪問指導 → ☆訪問指導を月3回に

ゆとりをもって授業準備ができるように改善してスタート

大学講義

★一般的初任者研修との大きな違い

- ①**大学院生と一緒に学ぶ**
- ②**全ての講義に授業担当者6名が関わる**
- ③**体験的な講義内容の充実**

①大学院生と一緒に学ぶ

今年度

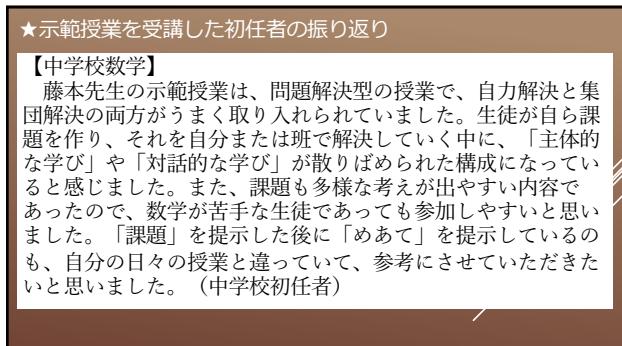
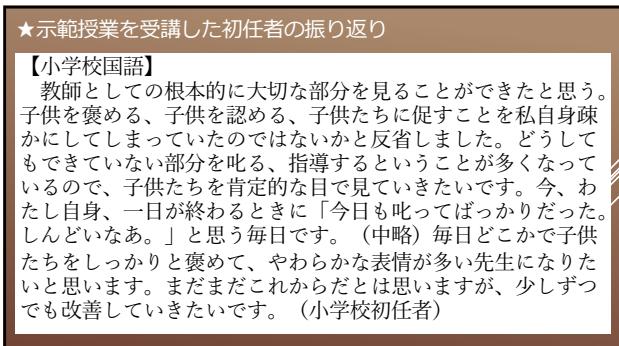
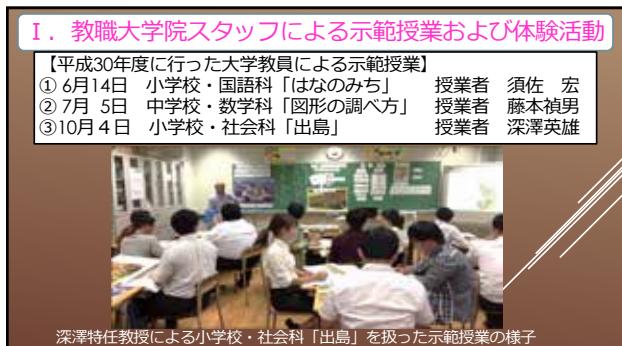
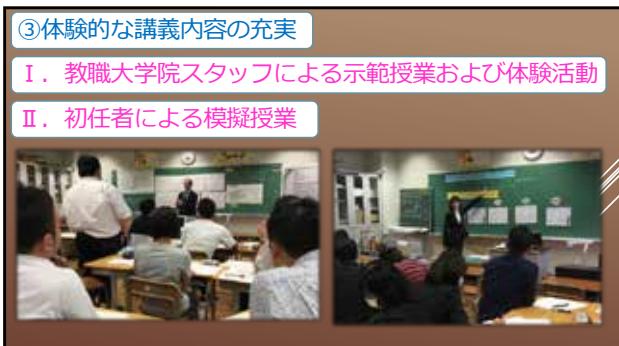
- ★授業実践力向上コース（院生）・・・8名
- ★学校改善マネジメントコース（現職院生）・・・9名

中学校でのカンファレンスの様子 小学校でのカンファレンスの様子

①大学院生と一緒に学ぶ

第1クォーター「学校・学級経営Ⅰ」 第2クォーター「授業・教材研究Ⅰ」
第3クォーター「授業・教材研究Ⅱ」 第4クォーター「授業・教材研究Ⅲ」
集中講義 「特別活動」・「道徳」（※1泊2日の宿泊研修も実施）
※黒字の講義・・・院生（スマス）と一緒に学ぶ
赤字の講義・・・院生（スマス）及び現職院生と一緒に学ぶ

初任者研修履修証明プログラム成果報告会資料



初任者研修履修証明プログラム成果報告会資料

★示範授業を受講した初任者の振り返り

【小学校社会】

深澤先生の示範授業は、一枚の絵からどんどん内容が広がって深まっていく様子が圧巻でした。生徒ひとりひとりの活躍の場を確保しながら、他教科と関連させ、知識がある子も退屈しない授業をされていたのがとても参考になりました。疑問がいっぱい出てきて、知的好奇心を掻き立てるられるようなところも面白く、生徒になった気分で授業を受けていました。ここまで授業をするには、やはり深い、深い教材研究が必要だと思いました。（中学校初任者）

I. 教職大学院スタッフによる示範授業および体験活動

【平成30年度に行った大学教員による体験的活動】

- ①7月26日 ICT「和歌山ジンジャールPR動画を作ろう」 授業者 豊田充崇
- ②1月6日 社会科「流通」（※講義の一部で示範授業） 授業者 谷尻 治
- ③1月17日理科実験「紙コップロケット」「浮沈子」・観察「植物のつくり」 授業者 中山真弘
- ④1月17日 プログラミング教育「ボール型ロボット」「ドローン操作」 授業者 豊田充崇



★体験的活動を受講した初任者の振り返り

★谷尻先生の生徒の実態を踏まえた教材研究や生徒への対応は素晴らしい、自分の心を揺さぶられるようでした。自分にもできるのか、どうすればいいのかなど考えました。（中略）現状の自分ではまだまだ足りないこともあります。（中学校初任者）

★自身理科が苦手で、いつも億劫になっていました。私が苦手意識を持っていることが子供たちの苦手意識を育ててしまうことになると反省しました。（小学校初任者）

★多角形を描くプログラミング、ボールを転がすためのプログラミング、ドローンの実験など、触れたことのない教材を扱うことができました。（中略）ICTをどう活かすかが自分の課題でもあると確認することができました。（中学校初任者）

II. 初任者による模擬授業

【模擬授業】小学校社会（1）、小学校国語（1）、中学校数学（1）
中学校社会（2）、中学校音楽（1）の計6授業



【初任者Fの課題】
個々の児童の良さを適切に認め、受容的な受け答えをしながら柔軟な笑顔で授業ができるようになること

★初任者Fの模擬授業を受講した初任者の振り返り

★F先生は表情がとても豊かで、授業を受ける子供たちにとって、とても心地よいものであると感じました。（中学校初任者）

★F先生の模擬授業は、準備物もそうですが、先生から発せられる授業のオーラのようなものが凄く柔らかく、温かい感じがして受けている自分たちが安心して受けられているなど感じました。（小学校初任者）

★F先生は子供への対応が上手いと感じました。子供の発言を拾い、全体へ投げ返すことや褒めることを自分ももっとしていかなければいけないと思いました。（院生）



訪問指導

A小学校の場合

[1学期]	[4月] 16日、23日	[5月] 7日、21日、28日
[2学期]	[6月] 4日、11日、25日	[7月] 2日
	[9月] 3日、10日	[10月] 15日、22日、29日
	[11月] 5日、12日、26日	[12月] 3日、10日
[3学期]	[1月] 21日、28日	[2月] 2日



★藤本特任教授の活動を受講した初任者Aの振り返り

★今回の示範授業を受けて、子供の興味関心から考えて気づかせることの大切さ、また大変さを知ることができた。私の今までの授業を振り返ってみると、いつも私の方からめあてや課題を示し、それを子供に考えさせるばかりであった。しかし、藤本先生は、ICTを使い子供たちの興味を一気に引きつけ、子供たちの柔軟な発想から自ら問題を考え、解決させていた。授業の中で生かす教材は、教科書や資料集だけでなく、子供たち自身なのだと感じた。

★初任者Aによる、国語授業でのICT機器を活用した教材文への興味づけ



教材文
「すがたをかえる大豆」
国分牧衛 著

★課題と今後の展望

- ①多忙感のさらなる軽減
- ②教科の専門性への対応力の強化
- ③新たな連携協力校との関係性の構築

★「学び続ける教師」を体現している1期生の姿



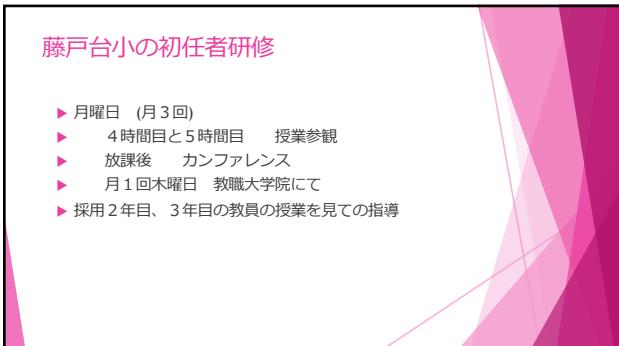
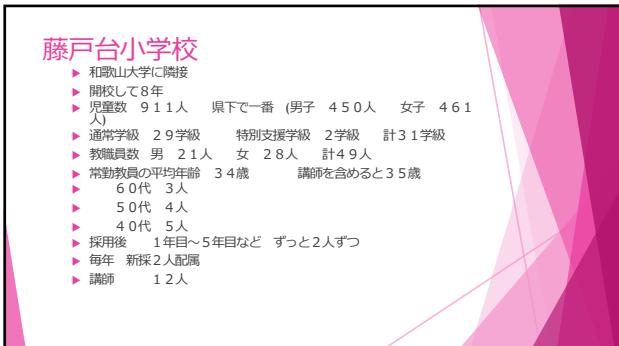
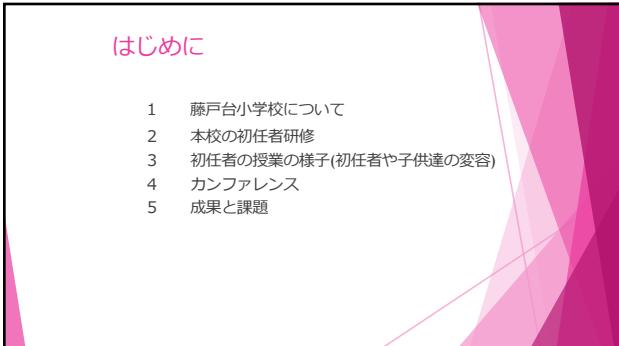
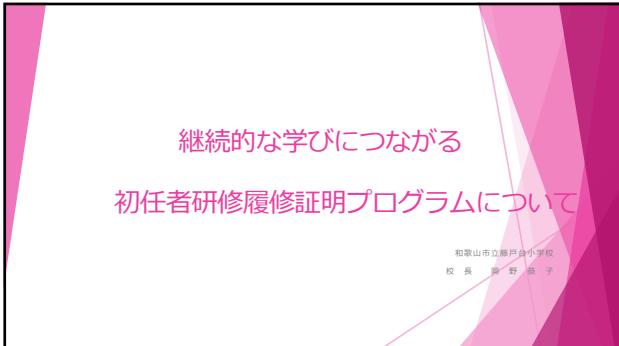
2期生、3期生、4期生…と継承されていくことを期待しています！

ご清聴ありがとうございました。



講義終盤のお楽しみ～血糖値を上げるモグモグタイム～

初任者研修履修証明プログラム成果報告会資料





成果と課題 カンファレンス



発問・指示・表情・子供の反応への応じ方・板書・・・DVDを見ながらの指導・助言や話し合い



成 果 課題

▶ 初任者にとって

- ▶ 授業力・学級経営力の向上
- ▶ 子供への対応の仕方
- ▶

▶ 学校として

- ▶ 新採だけではなく、若い教員への刺激
- ▶ 現職教育の研究の深まり
- ▶ 学び続ける教員の育成

・初任者の教材研究の時間
・授業づくりの視点から達成度を分析し今後の授業づくりの視点を明確に
・他の教員のカンファレンスへの参加
・校内指導員の関わり方
・ミドルリーダーの育成

